

2024 年度 修士論文
日本語における動詞「ある」と「する」と共起する
名詞の条件

東京外国語大学大学院 総合国際学研究科世界言語社会専攻言語文化コース
長谷川幹太

2025 年 1 月 5 日

目次

第1章	はじめに	3
第2章	「ある」と「する」をめぐって	6
2.1	「ある」と「する」の用法	6
2.1.1	「ある」	6
2.1.2	「する」	9
2.2	モノ名詞・デキゴト名詞	12
2.3	「動詞連用形＋名詞」との共起	15
2.4	これまでの研究のまとめとその問題点	21
第3章	「ある」と「する」と共起する名詞の条件	23
3.1	感覚名詞	24
3.2	心情名詞	27
3.3	時間の概念を持つ普通名詞	28
3.4	その他の名詞	29
3.5	共起関係のまとめ	30
3.5.1	存在の「ある」	30
3.5.2	軽動詞の「ある」	31
3.5.3	「がする」	32
3.5.4	「をする」	33
3.5.4.1	「動詞連用形＋名詞」の場合	33
3.5.4.2	「～物」名詞の難しさ	35
3.5.4.3	普通名詞の場合	36
第4章	インドネシア語との対照	39
4.1	感覚名詞	41

4.2	心情名詞	43
4.3	時間の概念を持つ普通名詞	46
第 5 章 結論		53

略記表

1, 2, 3	first, second, third person
AV	active voice
DEF	definitive
NEG	negation
BER	prefix ber-
PL	plural
PURP	purposive
REL	relativizer
SG	singular
UV	undergoer voice
X	exclusive

第 1 章

はじめに

日本語には、様々な名詞と共起できる動詞があり、その中でも特に「ある」と「する」は、その動詞としての用法も複数あるが、一つの意味でも多くの名詞と共起できる。以下にその用法を挙げてみよう。

- (1) 机の上に筆箱がある。
- (2) 居酒屋で飲み会がある。
- (3) この店から餃子の匂いがする。
- (4) 少年が森で虫取りをする。
- (5) 彼は、低い声をしている。

(1) の「ある」は、存在を表す動詞の「ある」で、この文では、机の上に筆箱が存在していることを表している。(2) の「ある」は一方で、軽動詞の「ある」とも呼ばれ、飲み会が居酒屋で行われることを表している。(1) では、場所に言及する時には、助詞の「に」が用いられ、(2) では、助詞の「で」が用いられることが異なり、双方の助詞を入れ替えることはできない。

- (1') *机の上で筆箱がある。

(2') *居酒屋に飲み会がある。

このように「ある」は、存在を表すものと事象を表すものがあり、それぞれ多くの名詞と共起できる。

(3) では、「が」とともに「する」が用いられ、餃子の匂いが感じられることを表している。(4) は、「を」とともに「する」が用いられており、ヲ格に付属した名詞の内容を行うことを表す。(5) は、義務的に「している」の形で用いられ、ある属性を主語が持っていることを表す。そして「する」は、多くの動詞的名詞と共起できる上、属性となる名詞とも共起できる。

しかしもちろん、(6) のように「ある」とも「する」とも共起しない名詞もある。軽動詞のような用法の場合は、動詞的でないもの（普通名詞など）は通常共起しないと思えるが、例えば、存在を表す「ある」と共起しないものは、存在しないものなのだろうか。

(6) a. *そこに {歩き／音／匂い／雨／健康／右／大量} がある。

b. *今日は、{歩き／音／匂い／雨／健康／右／大量} をする。

日常言語 (ordinary language) を用いて存在を表せないからといって、哲学上の概念における存在が語られ得ないが (Bricker 2016)、これらの名詞の指示対象すべてが「存在しない」とは考えにくい。しかし、なぜこれらは存在の「ある」とは通常共起しないのか。そして、なぜ「をする」とも共起できないのか。

また一方で、かねてから「動詞連用形＋名詞」の形式をとる名詞が「をする」と共起しないものと共起するものがあると存在し、その違いがどのような仕組みで起こっているのかは、よく議論されている。

(7) a. 駅に忘れ物がある。

b. 駅で忘れ物をした。

(8) a. カフェに飲み物がある。

b. *カフェで飲み物をした。

(7) の「忘れ物」では、「ある」と「をする」と共起できるが、(8) の「飲み物」は、「ある」とは共起できるが、「をする」とは共起しない。このように、「ある」が用いることができるか否か、「する」が用いることができるか否かは、名詞の性質を記述するうえで重要で、また、その共起の関係は、相互に関連しあっているとも推察できる。

以上のように、「ある」と「する」をめぐった共起する名詞の問題は、今まで注目されてこなかったものから、現在まで議論されていることまで存在する。特に存在を表す動詞「ある」との共起は、「する」との対照でよく挙げられるもののあまり研究されてこなかった。哲学的な存在とは異なるが、一般的な存在を表す語彙との共起を調べることで、日本語における一般的な存在の認識を知ることができる。

また、「する」との共起は、「ある」との共起よりも先行研究が多いものの、複合語を対象としたものばかりで、その範囲を一般名詞などまで広げれば、今までわからなかった規則性を発見できる可能性もある。

本稿では、主に「ある」と「する」と共起しない名詞に注目して、「ある」と「する」の共起の条件を明らかにし、両者に共通して関わる要素は何かを考察することを目的とする。後述するように、先行研究の分析では、「ある」と「する」の共起は、モノ名詞とデキゴト名詞を分ける指標として用いられ、それ以上は踏み込まれていない。共起の詳細な分析も動詞連用形を含む複合名詞でしか行われていない。

そのために、まず次の第2章では、「ある」と「する」をめぐって、どのような議論がされてきたかを概観する。そして、第3章では、「する」と「ある」と共起する名詞、共起しない名詞にはどのような特徴があるかを記述する。第4章では、インドネシア語で、「ある」と「する」との共起の違いがどの程度対応するかを調べた。最後に第5章で、結論とする。

第 2 章

「ある」と「する」をめぐって

ある名詞が「する」と共起するか「ある」と共起するかは、いくつかの議論がこれまで交わされてきた。この章では、それらの先行研究を概観し、また、続く第 3 章での分析で必要な前提知識を導入する。

2.1 「ある」と「する」の用法

まずはじめに、この節では、「ある」と「する」の用法について、先行研究でどのように述べられているかを確認する。

2.1.1 「ある」

『基本動詞ハンドブック』（[パルデシ 2023](#)）では、「ある」には以下のような用法が挙げられている。

1. 物の存在：（ある時点やある期間において、あるところに）1 つ、もしくは複数のものが存在する。(9a)
2. 事 of 存在：（ある時点やある期間において、あるものやところに）物事が存在する。(9b)
3. 人の存在：1 人、もしくは複数の（静的に捉えられる）人が存在する。(9c)
4. ある場所での物の存在：（ある時点やある期間において）空間的な広がりを持つものがあるところに位置している。(9d)
5. 所有物の存在：ある 1 人、もしくは複数の人（によって構成される組織や団体）が所有しているあるものが存在する。(9e)

6. 生物・ものの数量：ある生物やものに備わっている一定の数量（重さ、長さ、高さ、距離、数）が存在する。(9f)
7. 実現する物事：ある時点において実現する、ある出来事、行為が存在する。(9g)
8. 伝聞により把握される情報：他者の言葉（文字情報もしくは音声情報）に基づいてある人が把握する何らかの情報が存在する。(9h)
9. 人の生存：ある人が現世に、生きた状態で存在する。(9i)
10. 人の立場：ある人が、（肩書、役割、環境などに関する）何らかの立場に位置づけられる。(9j)
11. 状態、権利、役割の帰属：ある1人、もしくは複数の人が有していると位置づけられるある状態、権利、役割が存在する。(9k)
12. 事物の状況：あるもの、場所、物事が、何らかの状況に置かれている。(9l)
13. 人や動植物に備わる特徴：ある人・動植物・具体物に備わっている、何らかの特徴や関係（性質、付属物、人）が存在する。(9m)
14. 所有物としての事柄の存在：ある人が有する、何らかの事柄が存在する。(9n)
15. 期間・時間：ある物事に備わっている一定の期間、時間が存在する。(9o)
16. 過去に経験した物事：過去に1回もしくは複数回実現しているある出来事、行為が存在する。(9p)
17. 不定期に実現する物事：不定期に、もしくは状況に応じて実現する（可能性がある）ある出来事、行為が存在する。(9q)
18. 帰結：ある人にある物事（行為、出来事、思考、感情）の明確な根拠として認識される、何らかの事実が存在する。(9r)
19. 人の状況：ある人が、（肉体、あるいは精神に関する）何らかの状況に置かれている。(9s)
20. 実現に関与する事柄の存在：ある物事の実現に関与すると位置づけられる、何らかの事柄が存在する。(9t)

- (9) a. りんごがある。
b. 今日の遅刻には正当な理由がある。
c. この問題に異論のある人もある。
d. 自由の女神像はニューヨークにあります。
e. 山口さんは多くの財産がある。

- f. 伊藤さんは170センチある。
- g. 来週、お祭りがある。
- h. メモには、夕飯の前には帰宅するとある。
- i. 祖母が今もこの世にあれば、どんなに幸せなことだろう。
- j. 彼は教師という立場にありながら、これまで様々な問題を起こしてきた。
- k. 非は先方にあります。
- l. この会社の株価は下落の傾向にある。
- m. 加藤氏には深い知識と教養がある。
- n. 私は、昨日からずっと肩の痛みがある。
- o. 休憩時間が30分ある。
- p. 私は子供の頃、富士山に登ったことがある。
- q. このPCは、ここ最近、フリーズすることがある。
- r. お盆とあって、新幹線も満席だ。
- s. 祖父は今、病床にある。
- t. 成功するかどうかの鍵は、私たちの努力にあります。

このように動詞「ある」は、主として様々な物事が存在していることを表しているということがわかる。その他には、所有や状況も表すことができる。

小野 (2020) では、「ある」には、大きく分けて2つの構文があり、存在・所有を表す構文 (10) では、「ある」が選択する存在物、および所有物は実体のある物質を表す名詞 (モノ名詞) である。もう一つの、出来事の生起を表す構文 (11) では、事象や出来事を表す名詞 (デキゴト名詞) が共起する。

- (10) a. 庭に池がある。(存在文) (小野 2020:90)
- b. 太郎に財産がある。(所有文) (小野 2020:90)

- (11) a. 本場で経営会議がある。(単純事象名詞) (小野 2020:91)
- b. 温度に変化がある。(動名詞) (小野 2020:91)
- c. 裏山で地鳴りがある。(動詞派生複合名詞) (小野 2020:91)

d. 交差点で取り締まりがある。(複合動詞の派生名詞) (小野 2020:91)

以上から、本稿で「ある」は、存在や所有を表す動詞として扱う。存在・所有を表すことができる名詞の種類は豊富で、人、もの、行為、出来事、状況などを表す語彙と共起する。

2.1.2 「する」

『基本動詞ハンドブック』(パルデシ 2023)によると、「する」には以下のような用法が挙げられている。

1. 行為：人や動物などが自分の意志である行為を行う。(12a)
2. 自分の意志に関わらない経験：人や動物などが、自分の意志とは関わらないある行為を行う。(12b)
3. 生理現象：人や動物に、ある生理現象が生じる。(12c)
4. 怪我・病気：人や動物に、ある怪我や病気が生じる。(12d)
5. 他者に対する行為：人や動物などが自分の意志で、他の人や動物やものに対する働きかけとしてのある行為を行う。(12e)
6. 他者の職務・役割の成立：人や組織が、異なる人や組織に対して（職業、社会的な立場などの）ある職務や役割を果たさせる。(12f)
7. 異なるもの・人・組織への変化：人や動物や組織が、あるものや人や組織を、異なる性質を有するものや人や組織に変える。(12g)
8. 具体性の高い属性の変化：人や動物や組織が、あるものの知覚可能な何らかの性質や状態を、異なる性質や状態に変える。(12h)
9. 抽象的な属性の変化：人や動物や組織が、ある事物の何らかの機能や状況を、異なる機能や状況に変える。(12i)
10. 思考・感情・態度：人が、他の事物に対して、ある思い、考え、感情、態度を示す。(12j)
11. 複数人での行為：複数の人や動物などがある行為を行う。(12k)
12. 密着・接着：人や動物が、身体やものの一部分にあるものが密着あるいは接触した状態をもたらす。(12l)
13. 職務・任務の遂行：人や組織が、（職業や社会的な立場などに関する）ある職務や任務を行う。(12m)
14. 決定：人や組織が、ある事柄について何らかの決定を行う。(12n)
15. 主体の知覚：人に、五感に基づくある知覚が生じる。(12o)

16. 様相の提示：人や動物が、自身の表情、態度、姿勢、服装などにおける、ある特徴を示す。(12p)
17. 属性の所有：人や動物やものや場所に、(身体、形、色などにおける) ある性質、特徴が備わっている。(12q)
18. 価格：ものや場所や動物が、一定の価格を有する。(12r)
19. 時間の経過：一定の時間が経過する。(12s)

- (12)
- a. 最近息子がほぼ毎日アルバイトをしている。
 - b. 幼い頃、両親と離れて暮らしていた私は、何度も寂しい思いをしました。
 - c. 父が突然、大きなくしゃみをした。
 - d. 兄はジョギングの最中に石につまづいて転び、顔にけがをした。
 - e. 先生が生徒たちに、修学旅行の概要についての説明をした。
 - f. 田中先生が山田君を学級委員にした。
 - g. 父はいつも釣った魚を自分で刺身にします。
 - h. 姉はいつも部屋をきれいにしています。
 - i. 香さんはいつもチームの雰囲気をよくしてくれる。
 - j. 山本さんは、ご両親をととても大切にしています。
 - k. 佐藤さんたちが、向こうの方で内緒話をしているようだ。
 - l. 風邪を引くといけないから、マスクをした方がいいよ。
 - m. 姉は5年前から医者をしている。
 - n. 10キロの減量を、今年の第一の目標とします。
 - o. 寒気がするから、今日は薬を飲んで早く寝ることにしよう。
 - p. 三郎君はいつも、突然変な顔をする。
 - q. あの俳優さんは、白い歯をしている。
 - r. この車は、300万円します。
 - s. あと10分すると、講演が再開されます。

「する」の用法について、[岸本 \(2019a,b\)](#) は、その意味や項構造に注目して、動作主主

語構文と非動作主主語構文、一時的属性、恒常的属性の4つに整理している。

- (13) a. 学生が勉強をした。(動作主主語構文) (岸本 2023:4)
b. 火山が噴火をした。(非動作主主語構文) (岸本 2023:4)

- (14) a. 彼は今赤い目をしている。(一時的属性) (岸本 2023:3)
b. 彼は青い目をしている。(恒常的属性) (岸本 2023:3)

(13a)の動作主主語構文は、「学生」が「勉強をする」の主語であり、意味役割は動作主(agent)となる。一方、(13b)の主語「火山」の意味役割は、「噴火をする」の主題(theme)となる。つまり、動作主主語構文では、「する」が動作主として主語を、主題として動詞的名詞(「勉強」)をとっている。(13b)の非動作主主語構文は、「する」が「噴火」という主題をとり、「噴火」が火山に主題の意味役割を与える。その主題が項上昇によって、主語の位置に来ると分析されている。「する」の用法のもう一つは、身体属性構文とも呼ばれ、義務的に「している」か「した」の形で用いられ(14a, 14b)、主語にある性質や特徴が備わっていることを表す。

加えて、「する」は以下の(15)のような構文でも用いられるが、(14)における「する」とは、構成が異なる。

- (15) a. 彼は不機嫌な顔をしている。(身体行為構文) (岸本 2023:3)
b. 彼は赤いネクタイをしている。(着用行為構文) (岸本 2023:3)

また、小野(2020:90)では、「する」は以下のような構文で用いられると紹介している。

- (16) a. 研究／旅行／出張／散歩をする。(動名詞) (小野 2020:90)
b. 取り締まり／持ち帰り／金魚すくい／子育て／水洗い／一人歩きをする。(動詞由来の複合名詞) (小野 2020:90)
c. 寄付／言い訳／まばたき／仕事／コピー／ドライブをする。(単純事象名詞) (小野 2020:90)
d. 怪我／やけど／損／挫折をする。(経験名詞) (小野 2020:90)
e. 寄り道／張り紙／忘れ物／贈り物をする。(場面レベル名詞) (小野 2020:90)
f. マフラー／ネクタイ／蓋／カバーをする。(小野 2020:90)

g. 警察官／大学教授／主婦／運転手をしている。(役割属性名詞)
(小野 2020:90)

h. 青い目／丸い顔／四角い形をしている。(身体部位・形質名詞)
(小野 2020:90)

以上のことから、やはり「する」にも多くの用法があり、多くの名詞と共起できることがわかる。ある行為を行うこととしての意味が多く用いられるが、あるものを変化させたり、仕事をするを表すこともできる。しかし、この研究で対象とする「する」の用法には、(12f–12j, 12m–12o, 12q), (14), (16g, 16h) のような属性等を表す「する」は含まれない。本研究の論点の中心は、後述するモノ名詞とデキゴト名詞に関係する「ある」と「する」の用法にあり、その2つの区別に関連しない属性を表す用法には深く立ち入るべきではない。「する」構文の具体的な分析は、岸本 (2019a) が詳しい。また、小葉 (2023) は、(14a, 14b), (15a, 15b) のような属性を表す「する (している)」と共起できる名詞は、限られていると述べ、どのような名詞が、「している」とともに用いられるのかを網羅的に列挙している (小葉 2023:41)。

(17) 五感で得られる情報を表す名詞
【視覚】色、形、姿、見た目、様子、大きさ、デザイン、フォルム…【聴覚】音、声、音色…【味覚】味、舌触り…【嗅覚】匂い、香り…【触覚】触感、着心地、座り心地…
(小葉 2023:41)

(18) 内的性質・特徴・成り立ちを表す名詞
【人の】性格、人柄、気性、心、名前、生まれ、家柄、出自、生い立ち…【物の】性質、特徴、構成、構造、構図、編成、体系、値、値段、重さ、成り立ち、仕組み、組立て…
(小葉 2023:41)

2.2 モノ名詞・デキゴト名詞

日本語では、「もの」と「こと」が相対する概念として日常的に用いられ、「もの」はなにか具体的な実体のある物質（あるいは実体があると認識されるもの）を指すことが多い。一方「こと」は、出来事や事象・現象を抽象化して表現している (影山 2011:37)。こ

の「もの」と「こと」という名詞の表す意味の違いで、モノ名詞とデキゴト名詞^{*1}という区別が設けられ、いずれに所属するかは、個々の名詞ごとに決まっている (影山 2011:39)。モノ名詞とデキゴト名詞についての簡潔な説明としては、杉岡 (2020) が以下のようにまとめている。

名詞には具体物 (「犬」、「家具」など) や概念 (「夢」、「正義」など) を含む存在物 (entity) を表すモノ名詞と、行為 (「勉強」、「ゲーム」など) や現象 (「事故」、「増加」など) を表す事象名詞がある。この 2 種類の名詞はあらわれる構文が異なり、動詞「ある」が述語の場合、無生物のモノ名詞が主語であれば存在を表す文になる (「本棚がある」) のに対して、事象名詞が主語であれば出来事の発生を表す文になる (「事故がある」)。また、動詞「する」は事象名詞を目的語にとり (「勉強をする」)、モノ名詞とは一般に共起しない (「*家具をする」)。さらに、事象名詞は時間表現の修飾を許す (「30 分のゲーム」) が、モノ名詞は普通の文脈ではそれが不可能なことが多い (「*30 分の犬」) といった違いが見られる。(杉岡 2020:2)

つまり、以下のような表現において、容認度の違いが見られる (影山 2011)。

- (19) a. あそこに {会議室／運動靴／指揮棒} がある。 (影山 2011:36)
b. あそこで {会議／運動会／コンサート} がある。 (影山 2011:36)

- (20) a. *3 時間にわたる {会議室／運動靴／指揮棒} (影山 2011:36)
b. 3 時間にわたる {会議／運動会／コンサート} (影山 2011:36)

(19a, 20a) は、モノ名詞、(19b, 20b) は、デキゴト名詞が入っている。モノ名詞は、「ある」と共起する際に、助詞として「に」を使って存在を表し、時間の表現とは通常共起しない。デキゴト名詞は、「ある」と共起する際に、助詞として「で」を使ってそのイベントが起ることを表し、時間の表現と共起することができる。そして、「ある」と共起して存在の意味を表す (表せればモノ名詞) か、「する」と共起できるか (共起できればデキゴト名詞) も、モノ名詞とデキゴト名詞を分ける条件だとも述べられている。

影山 (2011) はさらに、デキゴト名詞とモノ名詞を分けるものとして、時間の概念を強調している。

^{*1} モノ名詞は個物名詞、デキゴト名詞は事象名詞と呼ばれることもあるが、本稿では統一して「モノ名詞」と「デキゴト名詞」という呼称を用いる。

典型的なモノ名詞は、「鉛筆、自転車、砂」のように単純な物質を表し、そこには時間の概念は関係していない。ここでいう時間の概念とは、ある出来事や動作がどれぐらい継続し、いつ終わったかといった概念 (アスペクトの概念) を指し、それは典型的には動詞が担当する意味概念である。(影山 2011:43)

「もの」は、物理的・抽象的な実体を持つと認識される物体を表すが、そのような物体は、時間的に変動しない (しにくい) という性質を持つ。一方、「火事」などの名詞は、出火から消火までの一刻一刻と変化していく出来事を指している (影山 2011:37 – 38)。杉岡 (2020) では、ある名詞が時間の概念を持つかどうかのテストとして、「する」、「始める」、「(軽動詞の) ある」「中」(杉岡 2020:16) などの表現と共起できるかで判断している。

(21) a. 今日から、冷やし中華を始める。

b. *今日から、小麦粉を始める。

(22) a. トンネル中は、電波がつながりにくい。

b. *ドーナツ中は、集中しなければいけない。

(21, 22) の例文では、一例として、「始める」や「中」と共起する名詞と共起しない名詞を示している。これらと共起する名詞は、デキゴト名詞的にも用いることができるといえる。

またその一方で、影山 (2011) は、モノ名詞の中でも一部には、時間の概念を含むものがあると述べている。

(23) a. なんだ、君の答案、白紙じゃないか！ (影山 2011:46)

b. *なんだ、君の答案、白い紙じゃないか！ (影山 2011:46)

(23a) の場合、「白紙」には、「本来なら何か記入があるべきであるのに、まだ何も書かれていない」という試験の間「白紙であった」という履歴があるために、この文脈で用いられるとしている*²。モノ名詞がデキゴト名詞的にも用いられる現象は、八木 (2017b) や定延 (2016) によっても指摘されている。

(24) X: 四色ボールペンのようなものは、日本にしかないでしょうね。

Y: え、四色ボールペン、北京のイトーヨーカドーでありましたよ。 (定延 2016)

*² 筆者の内省では、「白紙」が時間の概念 (履歴) を含むから用いられるのではなく、「白紙」と「白い紙」では、指すものが変わるために容認度の違いが見られると考える。

(24) では、「ボールペン」という語が、「に～がある」と「で～がある」というモノ名詞が要求される場面と、デキゴト名詞が要求される場面の両方で用いられていることがわかり、同じ語でもモノ名詞的にもデキゴト名詞的にも用いられることがあるとわかる。(24) は、探索によるモノのデキゴト化と呼ばれ、言語主体が主体的な「探索」の結果として語られる場合にデキゴト性を帯びると言われている。このため、[八木 \(2017a:6\)](#) は、「非動作性名詞（モノ名詞）と動作性名詞（デキゴト名詞）の間には明確な境界はなく連続体をなすという立場をとる」と述べている。

このように、日本語では、「もの」と「こと」の区別が明確にあるとされている。[Murphy \(2010:138\)](#) における名詞カテゴリーでも、THING と EVENT があり、EVENT は典型的に動詞として表現されると言及しているが、performance のような名詞も EVENT のカテゴリーに入れている。

また、両者が相対するものだという考えは、後述する先行研究においても受け入れられている。そのため、特に「動詞連用形＋名詞」の形の名詞については、「ある」とも「する」とも共起するといった通常のモノ名詞・デキゴト名詞とは異なった特徴を見せ、その法則については議論が交わされている ([小野 2014, 2020](#); [杉岡 2020](#); [小葉 2023](#))。

2.3 「動詞連用形＋名詞」との共起

まず、[小野 \(2014, 2020\)](#) は、(7, 8) の「忘れ物」と「飲み物」のように、「動詞連用形＋物」の形をとる名詞が、「ある」と「する」と共起できるものと、「する」とは共起できないものに分かれることに注目し、そのメカニズムを研究した。彼は、[Pustejovsky \(1995\)](#) の生成語彙論 (Generative Lexicon) の理論を用いて、説明を試みた。簡単にまとめると、「動詞連用形＋物」の形で表される名詞が、その発生原因として何らかの事象を要求するかが「をする」との共起に関わっているとしている。

生成語彙論では、述語の項である名詞からも述語の意味を構築するうえで欠かせない情報が提供されると考え、その仕組みを「共合成」と呼ぶ。

(25) 駅で忘れ物をした。 ([小野 2020:91](#))

(26) *カフェで飲み物をした。 ([小野 2020:91](#))

(25, 26) における「をする」との共起の容認性の違いは、場面レベル名詞と個体レベル名

詞の違いとして説明されている*³。場面レベル名詞である「忘れ物」が表わすものは、人が何かを忘れたという行為があってはじめてものが存在する。一方、個体レベルの名詞「飲み物」は、実際にそのような行為が行われなくてもものは存在する。場面レベル名詞では、その物の生起に係わる事象が名詞の意味に指定されているため、そこから事象の読みを引き出すことができる。ところが、個体レベル名詞は、名詞に含まれる行為は、出来事ではなく機能や目的を表わすので、事象の解釈は読み取ることができない。

まず、事象を表す動名詞、動詞由来の複合名詞、単純事象名詞は、(27)*⁴のようなクオリア構造 (Qualia Structure) を持つと考えられる。

(27) 「旅行」

AS: [ARG1 x], QS: [Formal role = event (e), Agentive role = travel(e,x)]

(小野 2020:94)

クオリア構造におけるクオリアは、「語彙項目に関連した、その語をもっともよく説明する属性や事象の集合」(小野 2005:24) と説明される。クオリア構造は、その語に関する属性や事象の集合を4つの種類に分けて記述する。(27) では、その4つのうち、Formal role(形式役割) と Agentive role(主体役割) が用いられている。形式役割は、物体を他の物体から識別する関係を表し、主体役割は、物体の起源や発生に関する要因を表す。形式役割は、そのものがどのようなタイプに分類されるかという知識を形成している。例えば、「りんご」なら果物という形式役割に属し、「馬」なら動物に属する。event という形式役割は、それが事象の一種類であり、デキゴト名詞であることを表し、「する」と共起することも説明できる。(29, 30) のクオリア構造では、object という形式役割が用いられており、その名詞がモノ名詞に分類されることを表す。主体役割は、x が主体となり「旅行する」という事象が「旅行」という語の成立要因になっており、その事象によって、「旅行」という語が成り立つようになる。(27) の AS の x 項は、主体となって旅行を行う者を示し、それはクオリア構造中の主体役割 (Agentive role) の事象参与者 x に対応している。また、「する」の構造は以下のように考えられる。

(28) 「する」

AS: [ARG1 x, ARG2 y], QS: [Agentive role = act_do(e,x,y)] (小野 2020:94)

*³ 小野 (2020) は、場面レベル名詞と個体レベル名詞について詳細に説明していないが、Carlson (1977) の言うような場面レベル述語 (stage-level predicate) と個体レベル述語 (individual-level predicate) に相当する用語だと考えられる。つまり、場面レベル名詞は、一時的な状態のものを指示する名詞で、個体レベル名詞は、恒久的に表すものを指示する名詞を意味している。

*⁴ AS は、Argument Structure(項構造)、QS は、Qualia Structure(クオリア構造) の略である。

「する」は動名詞の意味構造を共合成によって述語の意味として組み込むが、「する」が選択する補語名詞 (ARG2) の事象タイプと「旅行」の事象タイプが一致しているので、この合成プロセスにはミスマッチが生じない。

そして、(25, 26) について、「忘れ物」「飲み物」のクオリア構造は、以下のようになると考えられる。

(29) 「忘れ物」(場面レベル名詞)

AS: [ARG1 x], QS: [Formal role = object(y), Agentive role = lose(e,x,y)]
(小野 2020:97)

(30) 「飲み物」(個体レベル名詞)

AS: [], QS: [Formal role = object(y), Telic role = drink(x,y)] (小野 2020:97)

ここで重要なのは、形式役割が物 (Object) と指定されていること、それぞれの関連事象が主体役割と目的役割 (Telic role) という異なるクオリアに表示されることである。目的役割は、物体の目的と機能を表示するクオリアである。主体役割では、属性の意味表示に事象項が含まれ、目的役割には含まれないのは、後者が物の目的や機能を表し、実際の出来事の生起に係わらないからである。

「忘れ物」の主体役割の y 項(「忘れる」の対象)は、語形成の段階で物が充当すると考えられるので「忘れ物」の項としては行為主体にあたる x 項だけ表示される。「飲み物」における目的役割の x 項は、事象項 e が欠如しているため、項構造上に対応する項が存在しない。そのため、「飲む」行為の主体は、統語構造上で実現することはない。「する」は本来事象を選択するため個物名詞の「忘れ物」とはミスマッチが起きるが、強制 (coercion) が発動し、形式役割が object から event にタイプが変更されると考えられる。一方、個体レベルの名詞では、書き換えの対象にはなるが、主体役割に事象の指定を持たないので、強制による書き換えが適用しない。

杉岡 (2020) は、影山 (1993) と小野 (2014, 2020) の「動詞連用形+名詞」の語について述べている部分について反駁をし、意味解釈の違いが主要部の位置と関連付けることで「をする」との共起を説明している。

影山 (1993) は、「動詞連用形+普通名詞」は、具体的なモノの意味から「その物に係わる行為に従事するという意味に拡張が起こっている」と述べており、そのようなモノから行為への意味拡張によって単純名詞から動名詞への品詞転換が起きているとしている。しかし、「動詞連用形+普通名詞」の複合語では、モノではなく事象的な解釈しか許さないものも存在(「買い物」、「寄り道」など)し、基本にモノ的な解釈があるとは考えられな

いと杉岡 (2020) は述べている。

さきほど述べた小野 (2014, 2020) の説は、「動詞連用形＋もの」の複合語に個体レベル名詞と場面レベル名詞の区別があることを指摘し、ある名詞が「する」と共起したときに共合成が起こり、「忘れ物」などは事象の意味を表し、「飲み物」などは、事象を表さない、としている。しかし、「洗い物」、「買い物」、「読み物」など成立過程が存在の前提になっていない名詞で「する」と共起できるものもあり、主体役割の情報のみを参照できるという理論は変更する必要があると杉岡 (2020) はしている。また、その逆で、「足跡」は、「踏んだ跡を残す」という行為によって発生しているが、「する」と共起することはできない。

以上を踏まえ、杉岡 (2020) は、「動詞連用形＋名詞」複合語に見られる多義が主要部の位置と関連づけられる可能性を論じている。それらの名詞には特定の構文でデキゴト名詞的な解釈が要求される場合があるが、その際に左側要素の動詞の意味特性が複合語全体の性質を決定し、品詞を決定する形態構造上の主要部が、右側要素となっている。例えば、(31a) の「忘れ物」では、「忘れ」の部分が意味を決定し、「物」が品詞を決定している。

- (31) a. オフィスに忘れ物をしてきた。 (杉岡 2020:12)
b. 彼女は友達に贈り物をするのが好きだ。 (杉岡 2020:12)
c. 神様に願い事をしたんだ。 (杉岡 2020:12)
d. 来客から頂き物をしました。 (杉岡 2020:12)
e. 友人から頼まれごとをした。 (杉岡 2020:12)
f. 食卓に置手紙をする。 (杉岡 2020:12)
g. ご近所からもらい水をした。 (杉岡 2020:13)

上の例文では、ニ／カラ句がそれぞれ、複合語内の動詞が選択する場所 (31a) 「～に置く」、着点 (31b) 「～に贈る」、相手 (31c) 「～に願う」、起点 (31d) 「～から頂く」や動作主 (31e) 「～から頼まれる」といった意味関係を表しており、「複合名詞＋する」の述語全体の項となっている。それとは逆に複合語自体に対する連体修飾として表現すると、容認度が低くなる。

- (32) a. ??友人への贈り物をする。 (杉岡 2020:13)
b. *来客からの頂き物をする。 (杉岡 2020:13)

さらに、「動詞連用形＋名詞」の左側の要素が「する」と共起したときのアスペクト特性も決めている。複合名詞が含意する事象の種類には 2 種類ある (杉岡 2020:13)。

(33) 発生および場所や所有の変化

忘れ物、落とし物、拾い物、頂き物、もらい物、贈り物、供え物、貢ぎ物、施しもの、掘り出し物、願い事、頼み事、隠し事、張り紙、振り塩、付け火、置き傘、置手紙、置き石、入れ墨、入れ知恵、告げ口、投げ銭、投げ縄、あて布、もらい水
(杉岡 2020:14)

(34) 継続可能な活動

洗い物、調べもの、探し物、書き物、読み物、買い物、縫い物、編み物、繕い物、片づけ物、煮物、揚げ物、考え事、習い事、調べ事、悩み事、焚火、打ち水 (杉岡 2020:14)

(33) の複合名詞は、動詞が変化を含意しており、所有の発生や消失や所有者の変化を表す。そのため、これらの複合名詞が「する」と共起した場合は、終結性 (telicity) を持つ。

(35) a. {3 日以内に／*3 日間}贈り物をするつもりだ。 (杉岡 2020:14)

b. {たった今／*しばらくの間}、落とし物をした。 (杉岡 2020:14)

それに対して、(34) の複合名詞は、動詞が活動を表し、継続可能な行為である。例えば、「読み物をする」は、対象が不特定の「物」のため、アスペクトは非終結的 (atelic) となる。

(36) a. {しばらくの間／??たった今}、読み物をした。 (杉岡 2020:15)

b. {3 分間／*3 分で}考え事をした。 (杉岡 2020:15)

また、事象を表す軽動詞の「ある」は、デキゴト名詞を取った際には「出来事の発生」を表す。(33) の複合名詞では、出来事の発生を表すことができる語もあるが、(34) の複合名詞にはない。

(37) a. 日曜日のパレードでたくさん落とし物があった。 (杉岡 2020:15)

b. チャリティーバザーでたくさん施し物があった。 (杉岡 2020:15)

(38) a. *図書館でたくさん読み物があった。 (杉岡 2020:15)

b. *昼休みにカフェでたくさん編み物があった。 (杉岡 2020:15)

以上の例文 (35 – 38) から、このような複合名詞において左側の動詞が、意味特性や複合語の特性を支配していると分析できる。

そこで、[杉岡 \(2020\)](#) は、[小野 \(2014, 2020\)](#) のような共合成を用いず、「する」と共起できる複合名詞は、その構成要素と関連付けた形で、それぞれの複合名詞の語彙情報において指定されていると考えた。

- (39) a. 食べ物
形式役割：モノ (y),
関連事象：食べる (e,x,y) (目的事象), x: 動作主, y: 対象 ([杉岡 2020:17](#))
- b. 残り物
形式役割：モノ (y),
関連事象：残る (e,y) (成立過程), y: 対象 ([杉岡 2020:17](#))
- (40) a. 落とし物
形式役割：モノ (y)・事象 (e),
関連事象：落とす (e,x,y) (成立過程), x: 経験者, y: 対象 ([杉岡 2020:17](#))
- b. 張り紙
形式役割：モノ (y=紙)・事象 (e),
関連事象：貼る (e,x,on-z,y) (成立過程), x: 動作主, z: 場所, y=紙: 対象 ([杉岡 2020:17](#))
- c. 読み物
形式役割：モノ (y)・事象 (e),
関連事象：読む (e,x,y) (目的事象), x: 動作主, y: 対象 ([杉岡 2020:18](#))

以上示したように、モノ名詞のクオリア構造 (39) とモノ名詞とデキゴト名詞の多義を示す複合名詞のクオリア構造 (40) では、その形式役割が異なると [杉岡 \(2020\)](#) は分析した。(39) の名詞はどちらもモノという形式役割のみを持ち、右側要素の「物」のみが解釈上の主要部たりうる。

その一方、(40) のクオリア構造では形式役割として、モノと事象の 2 つが指定されている。これは、[Pustejovsky \(1995:93\)](#) では、「ドットタイプ」(あるいは複雑タイプ) と呼ばれ、2 つの異なる概念が語彙情報において共存していることを表す (同音異義ではない)。[Asher & Pustejovsky \(2013:46\)](#) では、以下のような例が言及されている。

- (41) John stopped by during our delicious dinner.
([Asher & Pustejovsky 2013:46](#))

(41) では、名詞の dinner がモノ名詞を選択する形容詞 delicious とデキゴト名詞を選択する前置詞 during と共に用いられることを挙げて、これを「共叙述」(coprediction)と呼んでいる。共叙述で現れることは、ドットタイプを示す名詞の特徴だとされている。日本語でも複合名詞を用いれば、共叙述の文を作ることができる。

(42) a. 長い書き物を短時間でするのは疲れる。 (杉岡 2020:20)

b. 学生は難しい読み物をしたがない。 (杉岡 2020:20)

(42) の複合名詞は、「する」と共起しているため、事象的な解釈を受けているが、同時にモノ名詞を必要とする形容詞に修飾されている。

2.4 これまでの研究のまとめとその問題点

これまでの先行研究をまとめると、「ある」と「する」には、多様な意味があり、様々な名詞と共起できることがわかる。「ある」と「する」との共起の研究は、モノ名詞・デキゴト名詞の区別に端を発している。存在を表す「ある」と共起するなら、モノ名詞として分類され、時間の表現と共起できるか、もしくは軽動詞の「する」と共起できればデキゴト名詞に分類される。しかし、逆にモノ名詞ならば、あるいはデキゴト名詞ならば、ある動詞と共起できるということはいえない。例えば、「味」という名詞は、時間との共起が難しいため、モノ名詞とも推測できるが、存在を表す「ある」と共起できるわけではない。天候を表す名詞（「雨」や「霧」など）は、時間表現と共起するものの、「する」とは共起しない。

(43) a. *10 分間にわたる味

b. *この飴にブドウの味がある。

(44) a. 2 時間にわたる{雨／霧}

b. *途中で{雨／霧}がしたら、引き返しましょう。

影山 (2011) は、モノ名詞とデキゴト名詞の区別に時間の概念を用いていたが、それ以降の動詞連用形を含む複合名詞の研究では、時間表現と共起するかどうか、「する」と共起するかどうか、そのどちらかが当てはまれば、デキゴト名詞として分類している。

基本的には、モノ名詞・デキゴト名詞は、それぞれの名詞ごとに定まっていて、それに従って「ある」や「する」との共起や時間表現との共起も説明できるが、一部の動詞連用

形を含む複合名詞では、「ある」とも「する」とも共起できる。それらのうち、どちらとも共起できるかは、語彙的に決められている。それは、小野 (2014, 2020) の説では、複合名詞の「する」との共起の事例のすべてを説明できず、杉岡 (2020) が、「する」と共起できる複合名詞については、ドットタイプだと対処したことが故で、小葉 (2023) でもそれを受け入れている。

付け加えると、これらの先行研究で扱われてきたものはすべて、助詞「を」を伴った「をする」の形で用いられる例のみを扱っている。しかし、「する」は助詞「が」を伴って、「がする」の形で用いられることもある。例えば、(6, 43) で扱った「音」や「匂い」、「味」といったこれまでの共起条件ではうまくいかない語は、「をする」とともに用いられないが、「がする」とは共起することができる。先行研究が意図的にそれらを省いていたのか、見逃していたのかは定かではないが、「がする」についても扱う必要があると考える。

本稿とこれまで概観した研究を比較すると、本稿では、今までモノ名詞とデキゴト名詞とに分けられて終わりだった名詞の分類に対して、より個々の名詞、特に「忘れ物」や「飲み物」のような複合名詞ではなく、普通名詞に注目する点が異なる。第3章では、今まで議論されてきた「する」と名詞が共起する条件、ならびに「する」が持つ性質を明らかにし、さらに、「ある」と共起できる名詞（モノ名詞）の中でも様々な共起の特徴を見せる名詞が存在し、モノ名詞的かデキゴト名詞的かの判断が難しい例もあることを取り上げる。また、先行研究で扱われた複合名詞についてもより詳細に分析し、その性質についても言及する。

第3章

「ある」と「する」と共起する名詞の条件

この章では、実際にモノ名詞とデキゴト名詞を分ける共起のテストから、ふるまいの異なる名詞ごとに、その特徴を詳解する。以下の表 3.1 は、名詞ごとに「に～がある」（存在の「ある」）、「で～がある」（軽動詞の「ある」）、「～がする」、「～をする」や時間表現と共起できるかによって、分類し、まとめたものである。これらの共起テストは、先行研究でも頻繁に用いられているものであるため、比較のためにも有用である。対象とした名詞は、先行研究では扱われなかった普通名詞が中心となっているが、分析をする際は、先行研究と比較するため適宜、複合名詞を用いることもある。普通名詞を中心に調べることで、これまでは構成要素となっている動詞の意味を読み込むためと説明されていた複合名詞の「する」との共起だが、読み込むべき動詞がないことで、より普遍的な「ある」と「する」の共起の条件がわかるようになることが期待できる。

また、もう一つの先行研究との違いとしては、共起のテストの対象に「～がする」が含まれる点である。複合名詞では「～がする」との共起は見られないが、対象とする一部の普通名詞は、「～がする」と共起して用いることができ、用いられる場面が異なるものの自動詞的に用いられる「をする」と項構造が似通っているため採用している。

表 3.1 名詞ごとの共起関係のまとめ

名詞	「に～がある」	「で～がある」	「～がする」	「～をする」	時間と共起
音、声、 味、匂い、 香り、手触り	*1	—	+	*2	?
光	+	—	—	—	?
気、気持ち、気配 ～気 (吐き気)、	+	—	+	—	?
立ちくらみ、 めまい、頭痛、 耳鳴り	?	—	+	—	+
～感 (違和感)、 感じ、予感	+	—	+	—	—
思い	+	—	+	+	+
鍋、ピアノ、風呂、 パソコン、	+	?	—	+	+
動画	+	*3	—	*3	+
映画、テレビ、 トンネル、	+	—	—	—	+
電車、漫画、日常、 愚痴、歌	+	—	—	—	+
雨、霧	?	?	—	—	+

*1 文脈によっては可能。

*2 属性を表す「をする (している)」では可能。

*3 特定のコミュニティでは可能。

3.1 感覚名詞

感覚名詞は、「音、味、匂い、手触り、光」のような、五感によって捉えられる名詞を指す。この分類の特徴としては、その感覚が知覚された際には、「がする」と共起し、その

ような意味では、ふつう「ある」とは共起しない。

- (45) a. {音／匂い／味／手触り}がする。
b. *{音／匂い／味／手触り}がある。

この中で「光」系の語彙のみは、「がする」とは共起せず、通常「ある」と共起できる点で異なるが、五感の一つの視覚を使って認識することができ、具体的な形がないものとして似た分類だと考えられる。

- (46) a. 夜道でも光があれば、安心だ。
b. *夜道でも光がすれば／したら、安心だ。

英語などでは、これらの語に関連する動詞として、放出動詞 (verbs of emission)*¹が用いられる (Levin 1993:233)。放出動詞は、通常自動詞で、第一項として放出者 (emitter) をとり、Perlmutter (1978:163) は、「感覚に衝突する (impinge) 刺激の非自発的放出」を表すと述べている*²。

1. Verbs of sound emission: *beep, rattle, knock, jingle, ring*
2. Verbs of light emission: *blink, sparkle, gleam, glitter, glow*
3. Verbs of smell emission: *smell, stink*
4. Verbs of substance emission: *bleed, sweat, fester*

日本語では、音や匂いについては、「がする」で表される。第一項は、主題で、放出者は必須項ではないが、「の」や「から」を用いて表示できる。

- (47) a. (踏切から) 音がする。
b. (餃子の) 匂いがする。
c. (生ものから) 変な味がする。
d. その服は、サラサラとした手触りがする。

感覚名詞の中でも、名詞によって「ある」との共起のしやすさは異なる*³。

*¹ しかし、日本語の「がする」は放出という意味では用いられず、主題が認識されたことを意味している。

*² なお、似ている動詞として、非自発的という点で特に、音を放出する動詞と、また、英語などにおいて、天候を表す動詞は、仮主語 *it* を伴う点で区別される。

*³ しかし、(48c, 48d) の場合、「に」に「は」を続けて用いると容認度が上がる。

- (48) a. *踏切から音がある。
b. *この部屋に餃子の匂いがある。
c. *この果物に変な味がある。
d. ?その服にサラサラとした手触りがある。

感覚名詞の多くは「～をする」とも共起できるが、事象的な動作を表すものではなく、身体属性構文として用いられる。そのため、「する」ではなく「している」という形を取る。

- (49) a. このピアノは、美しい音をしている。
b. 新しく買った香水は、良い匂いをしている。
c. 腐ったものは、変な味をしている。
d. その服は、サラサラとした手触りをしている。

時間表現との共起は、筆者の内省では容認度の判断が難しい。

- (50) a. 3秒間の音のあと、動いてください。
b. *3分間の匂いが違和感を覚えさせる。
c. *1分間の味が口の中に広がる。
d. *5分間の手触りが嫌になる。

語を変えると容認度が上がる場合もある。

- (51) a. このあとに、5分間にわたる音声が流れる。
b. 2時間にわたる{騒音／悪臭}に苦しむ。

また、前述したように光については、「がする」ではなく、「がある」が好まれる。

- (52) a. 洞窟の出口から光がある。
b. *洞窟の出口から光がする。

なお、物体については「がある」も用いることもできるが、より自然に表現するには、「が出る」を用いるほかない。

(53) 皮膚に汗が{出る／ある／*する}。

しかし、(52a, 53)における「ある」は、放出や名詞の指示するものが知覚されたことを表すのではなく、存在を表す表現として用いられている。加えて、他の感覚名詞（「音」や「匂い」）についても、文脈によっては「ある」と共起できる。それについては、後述する3.5.1節で取り上げる。

3.2 心情名詞

心情を表す「心情名詞」は、「気、気持ち、気配」、「～気 (吐き気)、立ちくらみ、めまい、頭痛、耳鳴り」、「～感 (違和感)、感じ、予感」、「思い」があるが、それぞれ「がする」とは共起するが、その他の共起関係は若干異なる。

「気、気持ち、気配」は、主に修飾表現を伴って、「ある」や「がする」と共起でき、時間表現との共起は一部の語で可能だ。

(54) a. 言葉の使い方が違う気{がする／*をする}。

b. コンサートに行く気がある。

c. *3 時間にわたるそんな気

(55) a. どこか悲しい気持ち{がする／*をする}。

b. 先生を尊敬する気持ちがある。

c. 3 時間にわたる悲しい気持ち

(56) a. 廊下から怪しい気配{がする／*をする}。

b. 廊下に怪しい気配がある。

c. 3 時間にわたる怪しい気配

「～気 (吐き気)、立ちくらみ、めまい、頭痛、耳鳴り」などの病気系の語彙は、「がする」と共起し、時間の表現とも共起できるが、存在を表す「ある」とは共起しにくい。

(57) a. 吐き気{がする／*をする}。

b. 3 時間にわたる吐き気

c. 今日は、吐き気がある。

- (58) a. {立ちくらみ／めまい／頭痛／耳鳴り}がする／*をする。
 b. 3時間にわたる{立ちくらみ／めまい／頭痛／耳鳴り}
 c. *今日は、{立ちくらみ／めまい／頭痛／耳鳴り}がある。

「～感 (違和感)、感じ、予感」は、気持ち系の語彙に比べて、時間との共起が難しい点で異なる。

- (59) a. その表現に違和感{がある／がする／*をする}。
 b. *3 時間にわたる違和感

「思い」は、感情名詞の中では珍しく、「をする」と共起ができる。

- (60) a. 背筋の凍るような思い{がする／をする}。
 b. 彼の中に必死な思いがある。

3.3 時間の概念を持つ普通名詞

これまでの先行研究で「ある」や「する」との共起を問題に扱う際には、ほとんど動詞連用形を含む複合名詞を扱っていたが、普通名詞の中にも、デキゴト名詞に必要な時間の概念を含むものは多い。それら時間の概念を持つ一般名詞の中には、「をする」と共起できるものとできないものがある。筆者の内省では、「鍋、ピアノ、パソコン、シャワー」などは、「をする」と共起できる一方で、「風呂、映画、テレビ、トンネル、電車、漫画、日常、愚痴、歌」などは共起できない。また、これらの語彙と似た語彙も同じ共起の特徴を示すことが多い。以下の例文 (61 – 65) は、時間表現と共起ができる名詞で、「をする」と共起できるものと共起できないものを示している。例文の中では、さらに関連する名詞も挙げている。

- (61) a. うちの犬は週に 1 回、{*風呂／シャワー／シャンプー／リンス}をする。
 b. 10 分間にわたる{風呂／シャワー／シャンプー／リンス}
- (62) a. 明日は、みんなで{鍋／焼肉／しゃぶしゃぶ}をする
 b. 2 時間にわたる{鍋／焼肉／しゃぶしゃぶ}

(63) a. *大学まで{電車／車／バイク}をする。

b. 2 時間にわたる{電車／車／バイク}

(64) a. *友達と{愚痴／歌}をする。

b. 2 時間にわたる{愚痴／歌}

(65) a. *トンネルをする。

b. トンネル中は、通信ができない。

3.4 その他の名詞

(6) でも取り上げたように、その他、表 3.1 に挙げていない名詞にも、色々な種類の名詞が「ある」や「する」と共起できない。

(66) a. *そこに{健康／右／大量}がある。

b. *そこで{健康／右／大量}がある。

c. *彼が{健康／右／大量}をする。

d. *{健康／右／大量}がする。

e. *2 時間にわたる{健康／右／大量}

これまでの先行研究では、日本語の名詞のカテゴリーについて、モノ名詞とデキゴト名詞という区別しか扱ってこなかったが、これらは「ある」とも「する」とも共起せず、モノ名詞にもデキゴト名詞にもあてはめることができないため、別のカテゴリーを用意する必要がある。これらに当てはまり、一般的に用いられるカテゴリーとして、Murphy (2010) が用いている分類に従い、以下のように割り振ることができる。

1. もっぱら形容詞的、あるいは副詞的に用いられる名詞 (「全身全霊」、「健康」など): PROPERTY
2. 方向を表す名詞 (「右」、「下」など): DIRECTION
3. 量を表す名詞 (「大量」など): AMOUNT

このような分類は、影山 (2011) が述べているような、個々の名詞ごとにモノ名詞かデキゴト名詞かが割り当てられる、という主張には合致しない。しかし、このことは、その2つに属さない名詞も存在することを示している。

3.5 共起関係のまとめ

以上のように、「ある」や「する」との共起する要素を分類していくと、それぞれの動詞について、どのような名詞と共起できるかがわかる。

3.5.1 存在の「ある」

存在を表す本動詞の「ある」は、先行研究などでは、モノ名詞とは通常共起できるという扱いだったが、より詳細に記述するならば、「視覚で捉えることができるもの。視覚で捉えられないものでも、頭の中でなんらかの枠組みで捉えられるもの」となる。そのため、頭の中で想像できるようなものや概念などは「ある」と共起できるが、その他の感覚的な刺激に関しては、視覚で得られるもの以外は本動詞の「ある」とは共起しない。言うなれば、そのような刺激とは関わりのない解釈であれば、「ある」とも共起できる。

- (67) a. 第3小節目に音がある。
b. その物質には、特有の匂いがある。
c. このお菓子には、複数の味がある。

(67) では、「音」や「匂い」が存在の「ある」とともに用いられるように、視覚で捉えることができる、枠組みを持つような解釈を与えている。(67a) の「音」は、楽譜で確認できる特定の音符のことを指している。楽譜上の「音」は、視覚で認識できるため、「ある」とは共起できる。(67b, 67c) の「匂い」や「味」は依然として、視覚で捉えられないが、そのもの特有の性質に言及しているため、容認される。また、他にも「ある」を共起できるようにする文脈はある。

1. リスト
2. 「ない」の対照として「ある」
3. 修飾

- (68) 彼の好きなものの一つに、パン屋の匂いがある。

(69) ミュートにしてないのに何も聞こえないんだけど、この動画に音ある？

(70) 楽譜の和音をよく見ると、ここにドの音がある。

(68) のように、リストにあるような形で語を挙げる場合、語に表されるそのものの内容というよりは、そのリストの中に存在する概念となり、「ある」と共起できるようになると考えられる。彼の好きなものが複数あり、そのうち「パン屋の匂い」があると述べている。(69) の「音ある？」という表現は、通常では解釈できない。

(71) *スピーカーを買い替えたんだけど、この動画に音ある？

しかし、音がないはずだという文脈を与えることで、「ない」ではなく「ある」ということが示され、共起がしやすくなる。(70) のような修飾表現は、「ドの音」のような下位分類的なものに限られるが、「ある」との共起を可能にする。(72) の例文で、「ブザー」は単に音の発生源を示しているので、「ある」とは共起しない。

(72) *ブザーの音がある。

3.5.2 軽動詞の「ある」

軽動詞の「ある」と共起できる名詞として、[杉岡 \(2020\)](#) は、「動詞連用形＋名詞」の形式をとる複合名詞については、「する」と共起した際に、終結性のアスペクトを示すものは、「ある」と共起できるものもあるが、非終結のアスペクトの場合は、「ある」と共起できないことを言及した。軽動詞の「ある」は、事象の発生を表しているため、継続できるものや連続しているものとは、共起がしにくいと考えられる。

また、軽動詞の「ある」と共起する際は、その名詞が動作主や主題を必要としない、あるいは存在しない必要がある。これは、参加者がまったく存在しないというわけではなく、動作主などが何も関わっておらずとも成立するような事象でなければならない、ということである。例えば、典型的な「会議がある」や「運動会がある」においては、ある時間に会議や運動会が行われることがすでに決定しており、動作主はその成立には関わっていない。(73) の文では、「忘れ物」という事象があったときに、それに関わる人物によって、その容認度が異なることを示している。

(73) a. ?駅で私の忘れ物があった。

b. 駅で彼の忘れ物があった。

(73) の文の解釈は、「で」を用いたデキゴト名詞的に「忘れ物」を用いており、「(誰かが)忘れ物した」ということが起きたのを伝聞等で聞いた際の発話である。筆者の内省では、「私の忘れ物」という風に自らが忘れたことを示すと容認度は低くなる。

軽動詞の「ある」と共起する名詞としては、「事故」などもある。「事故」は、ふつうそれを故意に引き起こした人物はいないため、「道路で事故があった」というような表現が好まれるが、近年では、「事故る」という表現が用いられるようになり、自らが事故を起こした場合に、用いられる表現が出現した。しかし、(75) が示すように、まだ生産性が高い表現ではない。

(74) a. 道路で事故があった。

b. 車で事故った。

(75) a. 森で火事があった。

b. *マッチで火事った。

3.5.3 「がする」

「がする」の使用は、「ある」や「をする」に比べて、かなり制限されている。「がする」は、感覚的で知覚されるものでなければならない。「ある」とは異なり、概念系の物は含まない。

(76) a. *常にナイーブな思考がする。

b. *ふと不吉な想像がする。

(77) a. 常に寒気がする。

b. ふと不吉な予感がする。

パルデシ (2023) では、「する」の用法として「人に、五感に基づくある知覚が生じる」ことを挙げているが、前述したように、「光」など視覚を用いる刺激については、「がする」ではなく「ある」が用いられる。

感覚名詞や「がする」と共起できるものは、「段々強くなる」というような表現と共起しやすいという特徴もある。

(78) a. 段々強くなる{音／違和感}

b. {音／違和感}がする。

(79) a. *段々強くなる{車／机}

b. *{車／机}がする。

これは、「がする」が用いられる名詞は、意味的に変化、あるいは変化できるパラメーターを含んでいるからだと考えられる。

3.5.4 「をする」

「をする」は、基本的な動詞的名詞（消滅、洗濯など）と共起して、動詞として使用できるようにするなど、軽動詞的な方法で用いられるが、共起する名詞が動詞的な意味に欠いている場合は、共起できるかどうかが変わると考えられる。

3.5.4.1 「動詞連用形＋名詞」の場合

先行研究で挙げられた「動詞連用形＋名詞」の形式の名詞の「をする」との共起する条件は、第2章で述べた。この節では、より詳細に様々な動詞連用形を含む複合語と一般名詞を対象に、「をする」となぜ共起できるかを考察する。

結論から言うと、[杉岡 \(2020\)](#) の主張するように、多分に語彙的な現象であることは、疑う余地がない。しかし、「をする」と共起する性質を考えると、すべてに当てはまらないまでも、法則性が見えてくる。

まず、日本語は右側主要部の言語であるため、右側要素の影響は大きい。右側要素のために品詞も決まっているし、共起も影響する。例えば、「～会」や「～祭」の複合語は、必ず「をする」と共起できる。

(80) {飲み会／大食い祭}をする。

(80) のような複合語では、右側の動詞要素は、左側の名詞の内容をより詳しくする役割で、アスペクトを担うような中心的な意味解釈は持たない。

他方、「～道」の複合名詞は、左側の動詞連用形によって、「をする」と共起できるかは異なる。

(81) {回り道／寄り道／*逃げ道／*別れ道}をする。

「逃げ道」と「別れ道」は、単に道を指しているが、「回り道」と「寄り道」は道を指すことではなく、事象的な解釈しか許さない。

(82) a. 2時間にわたる{回り道／寄り道／*逃げ道／*別れ道}

b. 長い{回り道／寄り道}は、2時間にわたった。

c. *長い{回り道／寄り道}は、100mにわたった。

(82)において、形容詞「長い」は「道」が長いことも、「回る」ことや「寄る」ことにかかった時間が長いことも修飾できるが、道が長いという解釈(82c)は容認度が低い。

また、[杉岡 \(2020\)](#)は、「をする」との共起は語彙的に決まっており、基本的には右側に「物」がついている影響で物的な解釈が要求され、形式的にも名詞として扱われるが、事象的な解釈が要求される場面でのみ左側の動詞連用形の要素が読み込まれるとしている。しかし、「動詞連用形＋名詞」の形式をとる名詞には、事象的な解釈しか許さないものも存在し、それらに関しては、物的な解釈が要求される場面でも、「物」を指しているかは疑わしいと考えられる。

例えば、「買い物」という語において、「買い物」は、モノ名詞的な解釈である買ったものを指すことはない。

(83) a. *たくさんの買い物が家にある。

b. *たくさんの買い物を入れたため、袋が重い。

c. デパート{*に／で}たくさんの買い物がある。

d. *彼は、いくつかの買い物を袋に入れ、店を出た。

e. *彼は、袋にいくつかの買い物を入れ、店を出た。

(83)では、「買い物」がモノ名詞的な解釈では用いられないことを示している。

このような用法には阻止が関わっていると考えられる。阻止とは、[Aronoff \(1976:43\)](#)によると、「単純な異なる形が存在するために、他の形が発生しない」現象を指す。[影山 \(1993\)](#)は、「動詞連用形＋名詞」の形の複合名詞の意味が、元の名詞の意味から動詞の意味へ特殊化したと述べていた点で否定されていたが、「動詞連用形＋名詞」の豊富な共起関係を見ると、単純な修飾関係では説明できない様々な意味の名詞を派生していることがわかる。そのため、すべての共起を説明できるような規則性はなく、「物」や「道」は動詞

と合わさって、様々な概念を表して、それらが一般的になっているため、通常予測されるような規則的な意味で用いられないことが起こりうるのではないか。

3.5.4.2 「～物」名詞の難しさ

そもそも「物」が動詞的な要素に付属して作られる名詞には、いくつか難しい要素がある。「物」は、多くの名詞を作れるが、その実、生産性は低い。例えば、「買い物」と「売り物」はそのふるまいが似た動詞でありながら、そのふるまいは大きく異なる。

- (84) a. デパートで{買い物／*売り物}をする。
b. 棚に{*買い物／売り物}がある。

これは、似たような語、似たような統語構造を持つ左側の要素であっても、「物」が付いた時の使用は、異なることがあることを示している。

また、「書き物」は言えても、「描き物」はない。

- (85) パソコンで{書き物／*描き物}をする。

「洗濯物」は、確認できる限りで唯一、動詞的名詞がついている形式で、「をする」とも共起できる。

- (86) 夜に{洗濯物／*爆発物／*紛失物}をする。

「洗濯物」から、「物」が多義である可能性も指摘できる。動詞的名詞から複合名詞を作る際、「物」は、ふつう「物（ぶつ）」として複合語を作る。

- (87) 遺留物、混入物、酸化物、創作物、爆発物、浮遊物、紛失物

また、「物」は、動詞連用形以外とも複合語を作ることができる。

- (88) アクションもの、粉もの、サスペンスもの、品物、汁物、刃物

(88) のような複合語も種類が多いわけではないが、複合名詞をつくる「もの」には、その左側要素のものと関連したものを包括する語をつくる「もの」と、デキゴト的な解釈を許す動名詞的な「もの」とが多義として存在しているのではないか。実際、「動詞連用形＋物」の名詞の中でも、生産的な意味とはずれ、特殊化したと見られる名詞が存在する。

(89) 入れ物、作り物、鳴り物、巻物、見もの

以上の複合名詞 (87 – 89) は、「する」とは共起しない。

(90) *{紛失物／刃物／巻物}をする。

「忘れ物をする」や「失くしものをする」などが容認度が高く、ふつうに用いられる一方で、同じことを表す「紛失物」が「する」とは共起しないのことは、「する」との共起が左側要素の意味的な役割を参照しているのではなく、「もの」が持つ一つの機能として、デキゴト名詞的な性質を持つようになり、「する」と共起できるようになるためであると考ええる。

3.5.4.3 普通名詞の場合

前述したように、筆者の内省では、「鍋、ピアノ、風呂、パソコン、シャワー」などは、「をする」と共起できる一方で、「映画、テレビ、トンネル、電車、漫画、日常、愚痴、歌」などは共起できない。

普通名詞との共起では、「をする」が担える意味が限られていると考えられる。「煮物をする」や「揚げ物をする」にも見られるように、「調理する」という意味を「をする」は担うことができ、そのため「鍋をする」とも言えると考えられる。

(91) 明日は、友達と鍋をする。

また、「調理する」の中でも限定され、作業が短時間、手間のかからないような作業だと容認度は低くなる。

(92) 今日の夜は、{*パン／*寿司／?お茶漬け／手巻き寿司／すき焼き／バーベキュー}をする。

「ピアノ」との共起では、「演奏する」という意味で「をする」を用いることができると考えられる。

(93) 路上で{ピアノ／ギター}をする。

「パソコン」との共起では、機械の操作を意味していると考えられる。

(94) {パソコン／スマホ／ケータイ}をする。

このように「をする」は、ある種の名詞とは一貫して共起することができるが、ある動詞の代替表現として「する」が用いられているのではなく、「する」が異なる特殊な意味を持っていることで共起を可能にしているとも考えられる。例えば、「楽器+をする」は、以下のような、編成の中での役割を担っていることを表す文脈でも用いることができる。

(95) a. バンドでは、ドラムを{する／している}。

b. 私は、吹奏楽部でユーフォニアムを{する／している}。

また、「をする」は趣味としての活動を表すことができる。

(96) a. 山田さんは、よく{園芸／将棋}を{する／している}。

b. 山本さんは、休みの時に{ピアノ／ドラム}を{する／している}。

しかし、このような文脈の時には、「する」ではなく「している」の方が容認度が高い。趣味の活動やある役割を担う、職業に就いている場合は、属性を表す構文が好まれるということだ。

また、「をする」は「映画」や「テレビ」とは共起できないことから、「見る」という意味では用いられない。

(97) *座って、{映画／テレビ}をする。

「乗る」や「過ごす」などの意味にも使用されないことから自分から行動を起こしたものでなければ、共起は難しいと考えられる。

(98) a. *東京まで、{車／電車}をする。

b. *退屈な日常をする。

また、「思い」という語については、「がする」とも「をする」とも共起できる点で特殊である。「がする」と「をする」では、修飾表現などで容認度の違いは見られない。

(99) a. 背筋の凍るような思い{がする／をする}。

b. 身の毛がよだつ思い{がする／をする}。

c. 暗澹たる思い{がする／をする}。

筆者の内省では、「をする」を使った場合は、何者かによってその思いが引き起こされたことが強調され、「がする」よりも被害を受けたような文脈で用いられやすいと考えられる。

以上の共起する名詞の分析から、本稿では「ある」と「する」との共起条件は、以下のよう整理する。

- ・ 存在の「ある」
視覚で捉えることができるもの。視覚で捉えられないものでも、頭の中でなんらかの枠組みで捉えられるもの
- ・ 軽動詞の「ある」
動作主などが、共起する名詞の表す事象の生起に関わっていないこと。動詞的名詞ならば、終結性のアスペクトであること。
- ・ 「がする」
実体などなく、感覚的であり、知覚されるもの。
- ・ 「をする」
動詞的名詞（「物」や「道」が付く複合名詞は、語彙的な要素がある）、趣味や役割となる名詞、料理（手間のかかるもの）、機械、楽器

このような結果から本稿は、まず、時間の概念によって分けたモノ名詞とデキゴト名詞の存在は疑うべくもないが、「ある」と「する」との共起とは、あまり関連していないことを主張する。時間との共起で分割したときに、動詞的名詞とそれ以外の普通名詞になったために、多くの場合で、「ある」と「する」との共起とも当てはまるようになったと考えられる。

第4章

インドネシア語との対照

この章では、筆者の関心から、インドネシア語の接頭辞 ber-でも日本語と「ある」と「する」に対応する共起の特徴が見られるのかを検討する。インドネシア語の接頭辞 ber-は、様々な語根となる語に付いて、日本語の「ある」に対応する所有の意味と、「する」に対応する行為の意味を表すことができ、本研究との関連性が見出せるため、有意義であると考ええる。

インドネシア語は、オーストロネシア語族マラヨ・ポリネシア語派の言語で、ある語根に接頭辞や接尾辞を付して、語根の形で用いられる語とは異なる意味や働きを持つ語を派生できることが特徴である。ber-もそういった接頭辞の一つで、語根から動詞となる語を派生させることができる。原 (2020:73) は、ber-の意味機能を5つに分けている。

1. 語根にかかわる動作・行為をする：berhasil「成功する」(hasil「成果」), berjalan「歩く、動く、進む」(jalan「道」)
2. 語根が表すもの・ことをもつ、備えている：berkeluarga「家庭がある」(keluarga「家族」), berharga「価値がある」(harga「価値」)
3. 語根が表すものを身につける、使う：berkacamata「メガネをかけている」(kacamata「メガネ」) berpakaian「服を着ている」(pakaian「服」)
4. 語根が表すものを生み出す：berkata「言う」(kata「言葉」), berkeringat「汗をかく」(keringat「汗」)
5. 語幹が表す数や単位でまとまる、たくさんある：bersatu「統一している」(satu「1」)

上記の1の機能は、日本語の「する」に対応し、様々な名詞に付くことで、それに関連する動作を表すことができる。2の機能は、日本語の「ある」に相当し、所有的な意味を表

することができる。3も「する」に対応するが、多くの場合「している」の形で用いられる（「彼はメガネをしている」）。4の意味は、日本語では「がする」で表されることもある用法だ。英語などの放出動詞的に用いることができる。5の機能は、「ある」や「する」に対応する機能がないため、本研究では扱わない。

一般的なインドネシア語の文法書では、ber-の機能について以上のように言及されるが、どのような名詞が語根として用いられる場合に、どのような意味で用いられるかについては、述べられることはあまりない。そこで、本稿で述べた共起が異なる名詞ごとに ber-がどのような機能で用いられているかを見ることで、モノ名詞やデキゴト名詞の部分で共通する部分があるかを検証してみる。それによって、通言語的に名詞の特徴による分類がわかるようになることも期待できるだろう。

そこでこの章では、第3章で共起関係や意味でまとめた名詞の種類ごとに、対応するインドネシア語の語彙が ber-と共に用いられた時にどのような機能で用いられるのか、あるいは用いられないのか調べる。この検証の目的としては、日本語の「ある」と「する」、モノ名詞・デキゴト名詞の性質がどの程度、他の言語でも適用できるのかを調べるもので、日本語との対照のみを行い、インドネシア語の ber-の詳細な分析は行わない。そのため、その研究方法としては、インドネシア語の用例の調査は、コーパスのみで行う。

この研究のために使用したコーパスは、Leipzig Corpora Collection のインドネシア語 Mixed 2013 ([Leipzig Corpora Collection](#)) と、コンコーダンスーとしては、必要に応じて MALINDO Conc([Nomoto et al. 2018](#)) を用いた。Mixed 2013 は、Leipzig Corpora Collection 内のサブコーパスで、インドネシア語の文を 74,329,815 文含んでいる。そのうち、延べ語数（トークン）は、1,206,281,985 語、異なり語数（タイプ）は、7,964,109 語ある。

コンコーダンスーである Malindo Conc は、2語からなるコロケーションを検索できるため、複数語からなる表現を検索する場合は、MALINDO Conc を適宜用いている。MALINDO Conc を用いる際は、複数のサブコーパスを用いた。以下の表 4.1 は、使用したサブコーパスの大きさをまとめたものである。なお、コーパスから引用した例文の出席

表 4.1 MALINDO Conc で使用するサブコーパスのサイズの一覧

サブコーパス	文	トークン数	単語数	句読点
IND MXD 2012	300,000	5,428,067	4,740,137	687,930
IND WEB 2012	300,000	5,540,573	4,831,254	709,319
IND WKP 2016	300,000	5,634,138	4,899,482	734,656

については、付録に示している。

また、本研究では、日本語の「ある」に相当するものとして、ber-の所有を表す機能を、「する」に相当するものとして ber-の関連する動作を表す機能を取り上げているため、どのような場合に所有と解釈するかを明らかにしなければいけない。本稿で用いる基準としては、以下のように判断している。

1. ber-を「持つ」という意味の動詞 (mempunyai, memiliki) に置き換えることができ、似た表現がコーパスに存在する。
2. 時間を表す表現と基本的に共起しない。

4.1 感覚名詞

感覚名詞は、五感で得られる刺激に関する語で、「音、味、匂い、手触り、光」などの語彙が該当する。感覚名詞の中では、視覚で得られる「光」のような語彙を除いて「ある」との共起はしにくく、そのような刺激を受けた際には「がする」と共起することを述べた。

インドネシア語では、感覚名詞に相当する名詞として、以下が挙げられ、ber-が付く際は、ふつう放出動詞のように用いられる。

- ・ berbunyi 「音がする、声を出す」 (bunyi 「音、声」)
- ・ berbau 「匂いがする」 (bau 「匂い」)
- ・ berasa 「味がする、感覚がする」 (rasa 「味、感覚」)*¹
- ・ bersinar 「光る」 (sinar 「光」) cf. 「*光がする」

これらの動詞は、(100) のように用いられ、(100a) は「ギシギシと音を立てる」こと、(100b) は、「マンゴーの匂いがする」ことを表している。

(100) a. Roda ber-bunyi ber-derit-derit.

車輪 BER-音 BER-ギシギシ

「車輪がギシギシと音を立てる。」

b. Kue-nya ber-bau buah mangga.

お菓子-DEF BER-匂い 果実 マンゴー

「そのお菓子は、マンゴーの匂いがする。」

*¹ 接頭辞 ber-は、語根となる語が r で始まる場合は、異形態の be-となり、r は重ならない。

日本語と同じような特徴を見せるなら、これらの動詞は ber-を用いても所有の意味では使えないと考えられる。実際、コーパス内では、所有を表す機能としてこれらの表現が用いられる例は berbunyi, berbau, bersinar では確認できなかった。一方で, berasa については、所有の意味的に用いられる例が確認できた。

- (101) a. Tanaman ini *me-miliki* bau seperti bumbu, dan *be-rasa* pedas
 作物 この AV-所有する 匂い ような 香辛料 そして BER-味 辛い
 tajam seperti lidah tergigit.
 鋭い ような 舌 噛まれる

「この作物は香辛料のような匂いがあり、そして舌が噛まれたような鋭い辛味があります。」

- b. Resep dibawah ini tidak *be-rasa* asin karena hanya
 レシピ に. 下 この NEG BER-味しょっぱい なぜなら だけ
 meng-gunakan saus tiram.
 AV-使う ソース 牡蠣

「オイスターソースしか使っていないので、この下のレシピに、しょっぱい味はありません。」

(101a) は、作物を実際に食べているのではなく、memiliki を使っていることから、作物を紹介しているような文脈だと思われる。食べているのでなければ、berasa pedas も「辛味がある」という意味で用いられていると推測できる。(101b) は、レシピを見て発言している場面なので、味わっているのではなく、「しょっぱい味ではない」ことを表していると考えられる。また、(101a) では、memiliki とともに bau が用いられている。MALINDO Conc 上では、memiliki bau の使用が 10 件確認でき、一般的ではないが、berbau も所有としても用いることは可能だと考える。

この結果は、日本語と対照すると、日本語の存在の「ある」に相当する部分がある。bunyi という音を表す聴覚で得られる刺激や、匂いといった嗅覚から得られる刺激は、他の感覚名詞と比べても「ある」とは共起しにくい (48)。berbunyi や berbau が所有の意味で用いられにくいのは、その面からは納得がいく。

sinar といった視覚から得られる刺激に関しては、日本語では「ある」と共起できた (46, 52)。しかし、bersinar は、「輝く」という意味が一般的になっており、sinar の「光」の意味が取り出せなくなっているとも考えられる。そのため、ber-が所有の意味で用いられる例は見つからなかった。同じく視覚系の berwarna 「色を使っている」(warna 「色」) は、

所有の意味で用いられることがある。

- (102) Bunga tomat ber-warna kuning, sedangkan bunga kentang ber-warna
 花 トマト BER-色 黄色 一方 花 ジャガイモ BER-色
 violet.
 堇色

「トマトの花は黄色い一方、ジャガイモの花は堇色をしている。」

(102) は、実際にトマトの花などを見ているのではなく、トマトの花やジャガイモの花の特徴を述べている文と捉えられる。(103) は、memiliki が warna とともに用いられている例文である。

- (103) Koi dapat me-miliki warna oranye, merah, putih, keemasan, atau
 鯉 できる AV-所有する 色 オレンジ 赤 白 金色 また
 hitam.
 黒

「鯉は、オレンジ色、赤色、白色、金色や黒色などの色を持つ。」

以下の表 4.3 は、感覚名詞の「ある」と「する」、ber-動詞のふるまいを比較を示している。

表 4.2 日本語とインドネシア語の感覚名詞のふるまいの比較

	「ある」	「がする」	「をする」	所有の ber-	行為の ber-
音 bunyi	－	＋	－	－	＋
匂い bau	－	＋	－	－	＋
味、触感 rasa	？	＋	－	＋	＋
光 sinar	＋	－	－	－	＋

表 4.3 感覚名詞のふるまいの比較

4.2 心情名詞

心情名詞は、「気、気持ち、気配」、「～気 (吐き気)、立ちくらみ、めまい、頭痛、耳鳴り」、「～感 (違和感)、感じ、予感」、「思い」などの、具体的には存在しない心情を表す名

詞で、特徴としては病気系の語彙（吐き気、立ちくらみ、頭痛など）を除いて、「ある」と共起でき、かつ助詞の「が」とともに「する」とも共起できる。

- ・「気、気持ち、気配」、「～感 (違和感)、感じ、予感」: rasa 「感じ」, gelagat 「気配」, suasana 「雰囲気」
- ・「～気 (吐き気)、立ちくらみ、めまい、頭痛、耳鳴り」: pening 「めまい」, mual 「吐き気」, sakit kepala 「頭痛」
- ・「思い」: dugaan 「予想、想定」, pikiran 「考え」

まず、「気、気持ち、気配」、「～感 (違和感)、感じ、予感」等の語彙については、感覚名詞でも用いられた *berasa* は、コーパスでも多くの用例が確認できるが、*gelagat*, *suasana* も *ber-*が付く形で用いられる例は多くある。

- (104) a. Yang pertama penempatan bayangan tokoh-nya be-rasa aneh.
REL 一つ目 配置 影 人物-DEF BER-感じ 奇妙な
「一つ目は、人物の影の配置に奇妙な感じがある。」
- b. Karena itu dia be-rasa tidak nyaman dirumah-nya.
なぜなら それ 3SG BER-感じ NEG 快適な に. 家-3SG
「そのため、彼は自分の家で不快な思いをしている。」
- c. ... dia sudah ber-gelagat aneh sejak pagi.
3SG すでに BER-気配 奇妙な 以来 朝
「朝から彼は変な様子だ。」
- d. Namun, banyak toko yang telah di-beri hiasan ber-suasana
しかし 多くの 店 REL すでに UV-与える 飾り BER-雰囲気
Natal.
クリスマス
「しかし、多くの店がクリスマス風の装飾で飾られている。」
- e. Jika anda sering ber-suasana hati kurang enak pada hari Senin,
もし 2SG よく BER-雰囲気 心 足りない 良い に 日 月曜日
「もし月曜日によく雰囲気が悪くなるなら、」

(104) は、berasa, bergelagat, bersuasana について、「ある」的に用いられるか「する」的に用いられるかの判断のため、主語が人物（感じる主体）の場合と、刺激など（感情を覚えさせるもの）の場合に分けて例文を挙げた。berasa, bersuasana の場合は、(104a, 104d) のように刺激も主語としてとる例が見られたが、bergelagat の場合には見られなかった。

病気系の語彙 (pening 「めまい」, mual 「吐き気」, sakit kepala 「頭痛」) は、形容詞的に用いられるものと、名詞的に用いられるもの (sakit kepala は名詞的に用いられる) とがある。ber-が付く例は、非常に稀で、ふつうそのままの語の形で用いられるか (105a)、その他の動詞 (mengalami 「経験する」, terasa 「感じられる」など) の目的語として用いられる (105b)。

(105) a. Akhir-akhir ini, dia sering pening dan hampir pingsan.

最近 この 3SG よく めまい と ほぼ 気絶

「最近、彼はよくめまいを起こし、気絶寸前になる。」

b. Seakan melayang sampai-sampai terasa sakit kepala.

ように 浮く さえ 感じられる 痛い 頭

「頭痛を感じるほど浮いているようだ」

「感」や「思い」に相当する語としては、dugaan や pikiran があるが、berduga(an) の使用は一例しか確認されない一方、berpikir(an) は、「考える」ことを意味し、インドネシア語では一般的に用いられる語彙である。

(106) a. Cameron justru ber-pikiran sebaliknya.

キャメロン ちょうど BER-考え 反対に

「キャメロンは、まさに反対の考えを持っていた。」

b. Rasanya perut-ku lapar jika aku selalu ber-pikiran hal itu.

感覚 腹-1SG 空腹 もし 1SG いつも BER-考え こと それ

「そのことをずっと考えると、お腹が空く。」

以下の表 4.4 に、日本語の心情名詞とインドネシア語の対応する名詞のふるまいをまとめた示した。しかし、「気」や「感」に相当する単語をインドネシア語で明確に区別するのは難しく、それぞれでふるまいも異なるため、病気系の語彙以外は、日本語とインドネシア語を分けて表示している。心情名詞の日本語とインドネシア語の結果を比較すると、日本

表 4.4 日本語とインドネシア語の心情名詞のふるまいの比較

	「ある」	「がする」	「をする」	所有の ber-	行為の ber-
「気」系	?	+	—		
「病気」系	?	+	—	—	-
「感」系	+	+	—		
「思い」	+	+	+		
rasa 「感じ」, suasana 「雰囲気」				+	+
gelagat 「気配」				—	+
dugaan 「予想」				—	—
pikiran 「考え」				+	+

語の「思い」や「感」系の名詞のように、モノ名詞的にもデキゴト名詞的にも用いられるものとしては、rasa, suasana, pikiran が該当した。rasa, suasana は日本語のそれと意味が近く感じられるが、pikiran は、「考え」という訳語のように、日本語では「思考」などにも訳せるが、そのような語彙は日本語では、「する」とともに用いられにくい。gelagat は、「気配」と訳せるため、存在の「ある」では表せない内容で、インドネシア語でも ber- が付いて所有を表さないため、日本語と共通していると言える。

しかし、インドネシア語で病気系の語彙と dugaan に ber- が所有の意味でも行為の意味でも付かないことは、日本語からは予想できない結果だった。

4.3 時間の概念を持つ普通名詞

3.3 節では、時間の概念を含む普通名詞をあつかい、「をする」と共起できるかどうかで 2 つに分けた。普通名詞と「をする」との共起の条件として、日本語の「をする」は、なんらかの「調理をする」ことや「楽器を弾く」ことなどと似た意味を表すことができ、目的語が調理できるものや楽器であれば、「をする」と共起できることが分かった。これらの「をする」と共起できる名詞に相当するインドネシア語の表現も接頭辞 ber- で派生することで語根に関わる動作・行為を表すことができる。

まず、「調理をする」という意味を表せるかについて、コーパス内のデータでは、語根に料理名をとって、「調理をする」という意味で ber- が使われることは稀だった。bersate (sate 「串焼き」), bernasi goreng (nasi goreng 「ナシゴレン」) の例は確認できなかった

が、berendang (rendang 「ルンダン」) はわずかながら確認できた*2。

- (107) … proses *be-rendang* (sangrai) hingga penggilingan sampai 2 kali untuk
工程 BER-ルンダン 焙煎 まで 挽くこと まで 2 回 PURP
men-dapatkan kopi yang siap saji.
AV-得る コーヒー REL 準備ができている 調理

「すぐに飲めるコーヒーを得るための、2 回までの焙煎して挽くまでの工程」

しかし、berendang が (ならびに接頭辞に meN-を伴う merendang も) 「ルンダンを作る」という意味では用いられていない。(107) では、「焙煎する」という意味で用いられており、merendang もルンダンが煮込み料理であることから、「熱を加える」というような意味で用いられることが多い。

「楽器を弾く」、「機械を操作する」、「入浴に関する動作をする」*3は、ber-とともに用いられる例が確認できた。

(108) は、接頭辞の ber-が楽器を表す語根に付いて、用いられている例文だ。bergitar 「ギターを弾く」の用例はある程度あるが、berpiano 「ピアノを弾く」、bergamelan 「ガムランを叩く」は非常に少なく、bergamelan は 2 例だけである。

- (108) a. Ketika malam tahun baru kami di-minta untuk ber-nyanyi
時に 夜 年 新しい 2PL.X UV-求める することを BER-歌
sambil *ber-gitar*.
ながら BER-ギター

「大晦日のときに、私たちは歌いながらギターを弾くことを求められた。」

- b. … keduanya mampu meng-eluarkan kemampuan *ber-piano* dengan
2 つとも できる AV-出る-APP 能力 BER-ピアノ で
baik.
良い

「両者ともピアノの技術をよく出せていた。」

*2 なお、Farhan Athirah Abdul Razak 氏との私信では、マレー語ではあるが、*bernasi goreng とは言わないが、berendang は言えると述べていた。

*3 しかし、mandi は単体で動詞として用いられるため、名詞の性質にはあまり関わらない。

- c. … ber-keliling kampus untuk mem-perkenalkan kebudayaan gamelan
BER-周り キャンパス PURP AV-紹介する 文化 ガムラン
dan kesejatian diri mereka dalam *ber-gamelan*.
と 真正性 自身 3PL 中に BER-ガムラン

「キャンパスを周って、ガムラン文化と彼らのガムランを叩くことの真正性を紹介する。」

berponsel「携帯電話を使う」, bertelepon「電話する」, berkomputer「パソコンを使う」はどれもある程度の頻度で用いられる。berkomputerは、Kamus Besar Bahasa Indonesia 第6版(インドネシア語大辞典)などの辞書に載っていないにも関わらず、用例が多く見られたのは、多くは所有の意味だと思われるが、特筆すべき点だ。

- (109) a. Aplikasi ini ber-guna untuk me-mudahkan aktivitas
アプリケーション これ BER-使用 PURP AV-簡単にする 活動
ber-ponsel melalui PC,
BER-携帯電話 通して PC

「このアプリケーションは、PCを通して携帯電話の使用を簡易にするのに有用で、」

- b. Dia masih sering *ber-telepon* ke kantor dan meny-ampaikan
3SG まだ よく BER-電話へ会社と AV-伝える
pesan-pesan dan saran liputan.
メッセージ PL と 提案 取材

「彼は未だによく会社で電話をかけ、メッセージや取材の提案を伝えている。」

- c. Demikian tips singkat mengenai cara *ber-komputer* yang
そのような ヒント 短い ついて 方法 BER-コンピューター REL
aman.
安全な

「安全にコンピューターを使う方法についての簡単なヒントです。」

bermandi, bersampo「シャンプーをする」, bershower「シャワーをする」については、用例が多いわけではないが、確認できた。しかし、bermandiは、「入浴する」ではなく、

「浴びる」という意味で用いられる。なお、berconditioner「コンディショナーをする」は、一例だけ確認できたが、「コンディショナーを含む」という所有の ber-とともに用いられていた。

- (110) a. Karena itu, *ber-mandi* cahaya matahari adalah barang mewah
だから それ BER-入浴する 光 太陽 である 物 豪華な
bagi orang Rusia.
にとって 人 ロシア

「したがって、日光を浴びることはロシア人にとって贅沢なものだ。」

- b. Dapat di-pakai oleh mereka yang ingin *ber-sampo* setiap
できる UV-使う によって 3PL REL したい BER-シャンプー 毎
hari.
日

「毎日シャンプーしたい彼らによって使われる。」

- c. Para peserta di-wajibkan tampil seseksi mungkin saat *ber-shower*
たち 参加者 UV-義務とする 現れる セクシー たぶん とき BER-シャワー
di hutan belantara.
に 森 ジャングル

「参加者らは、ジャングルの中でシャワーを浴びながら、できるだけセクシーに登場しなければならない。」

一方で、その逆、日本語では「をする」と共起しないが、ber-接頭辞の派生で動作・行為を表す名詞もある。例えば、laguは「歌」を表し、(111a)では、「歌を歌う」という意味で用いられている。加えて、(111b)では、berkeluhは「愚痴を言う」(keluh「愚痴、ため息」)ことを表している。ちなみに、berkeluhの用法の多くはkesah「ため息」とともに用いられ、ため息をつくことを表している。

- (111) a. Dia mulai mem-etik gitar-nya penuh asyik dan mulai *ber-lagu*
 3SG 始める AV-鳴らす ギター-3SG 満杯の 熱中して と 始める BER-歌
 dengan suara yang begitu merdu.
 で 声 REL そのような きれい

「彼はギターを激しくかき鳴らし、きれいな声で歌い始めた。」cf. *歌をする。

- b. Mestinya malam itu saya tak usah *ber-keleuh*.
 当然 夜 その 1SG NEG 必要 BER-愚痴

「当然、その夜は愚痴を言う必要はなかった。」cf. *愚痴をする。

移動するものとの共起では、mobil「車」も kereta「電車」も「乗る」の意味でも用いることができ、televisi「テレビ」とともに用いられれば、例こそ多いわけではないが、それを「見る」ことなどを表すこともできる。しかし、(113b)のように、berfilmは「映画(film)を見る」ことではなく、「映画を撮る」ことを表す。

- (112) a. Orang tua-nya hanya PNS biasa, tapi dia bisa *ber-mobil* ke
 人 古い-3SG ただ 公務員 普通 しかし 3SG できる BER-車 へ
 sekolah.
 学校

「彼の両親は普通の公務員だが、彼は車に乗って学校に通っている。」

- b. … kami harus *ber-mobil* di tengah hujan badai sepanjang hari.
 1PL.X すべき BER-車 に 中央 雨 台風 中 日

「一日中、私たちは暴風雨の中を運転しなければいけない。」

- c. Yang jauh datang *ber-kereta*, yang dekat datang ber-jalan kaki.
 NMZ 遠い 来る BER-電車 NMZ 近い 来る BER-道 足

「遠い人は電車に乗って、近い人は歩いてくる」

(113) の例文では、televisi「テレビ」と film「映画」という「見る」ことができるものを語根にとった場合の ber-の用法を示している。(113a)は、「テレビを見る」という用法で使われていると考えられるが、(113b)は、「映画を撮る」という意味で用いられている。

- (113) a. Semuanya di-hadirkan Toshiba untuk men-ambah kenyamanan ketika
 全部で UV-提供する 東芝 PURP AV-増加 快適性 ときに
 me-nikmati sensasi ber-televisi.
 AV-楽しむ センセーション BER-テレビ

「すべて、テレビを見て楽しむ感覚の快適さを向上するために東芝によって提供されている。」

- b. ... jadi semangat-nya harus ada ketika kalian ber-film.
 だから 熱意-DEF べき ある とき あなた方 BER-映画

「だから、あなた方が映画を撮影してるときは、熱意がなければいけない。」

日本語とインドネシア語の時間の概念を持つ普通名詞で共起の比較をすると、以下の表4.5のように整理できる。コーパスでの調査のため頻度を基にした判断だが、様々な違いが確認できた。楽器系と機械系の語彙は、「をする」でも ber-が付いても、それを使うこ

表 4.5 「をする」と ber-と共起できる名詞の比較

名詞	「をする」	(行為の)ber-
料理系	+	?
楽器系	+	+
機械系	+	+
入浴系	+	?
「愚痴、歌」	—	+
乗り物	—	+
「テレビ、映画」	—	?

とを表すことができる。入浴に関するものも頻度こそ多くないが、言えないことはない。料理系に関しては、コーパスでは「その料理を作る」という意味では確認できなかった。「愚痴、歌」、乗り物系、「テレビ、映画」に関しては、インドネシア語では ber-と共起して行為を表すことができる。

結論としては、インドネシア語の ber-は、感覚名詞、感情名詞では、同じような性質を見せるが、時間の概念を持つ普通名詞との共起では、「をする」よりも多様な名詞と付くことで、それに関する動作を行うことを意味することができることがわかった。しかし、語根に料理名をとって「調理する」という意味になる用法や楽器名をとって「楽器を弾く」

という用法は、日本語よりも一般的ではないようだ。

第5章

結論

動詞連用形を含む複合名詞の形で今まで研究されてきたモノ名詞・デキゴト名詞あるいは、「ある」と「する」の共起の研究だったが、本稿では、その他の普通名詞なども同じように検証した。そして、名詞をどのようなカテゴリーに分けることができるか、「ある」や「する」は、より詳細にどのような名詞を選択しているのか、それぞれの名詞の性質はどのようなになっているのかを分析してきた。

改めて第3章で述べた共起の条件をまとめると、存在を表す「ある」は、基本的にモノ名詞をとるものの、その内容は、視覚で捉えられるもの、あるいは見えないものでも、概念的な枠組みがあるものという制限がある。軽動詞の「ある」は、デキゴト名詞の中でも、「する」がついた際に終結性を持つもの、また動作主などが意識されない事象でなければいけない。

「をする」との共起の複雑さは、複数の軸に整理できる。「(を)する」は、動詞的名詞であれば、どのような語とも共起できる。しかし、それ以外の名詞が問題となる。普通名詞を見れば、名詞に含まれる事象的な要素を読み込んでいるというよりは、「する」が担うことができる意味で、おそらくその意味が典型的にその名詞とともに用いられるものでなければならない。複合名詞との共起では、普通名詞と比較すれば、明らかに多様な意味を担うことができるので、動詞部分の意味を読み込んでいるとも考えられるが、その複合名詞がどれほど、動詞の意味を引き継いでいるか、デキゴト名詞的に用いられる要素を含んでいるかという語彙的な部分もある。

また、「ある」と「する」との共起や時間の表現との共起だけでは、モノ名詞かデキゴト名詞かうまく分類できない名詞も複数あった。本稿では、そのカテゴリーの是非や用法の特徴などは深く立ち入らないが、意味的な分類はこれまで行われているものに加え、統語や共起の特徴などから様々な名詞のカテゴリーが注目されるべきだ。

インドネシア語との対照では、日本語で対象とした名詞に対応したインドネシア語の語彙が、接頭辞 ber-とともに用いられたときに、どのような意味で用いられるか、あるいは用いられないかを「ある」と「する」との共起に対応させて、それがどれほど共通しているのかを調べた。日本語で「ある」によって、存在を表しづらいものは、インドネシア語の ber-でも所有を表すことが少ないことがわかった。軽動詞の「する」は、様々な名詞と共起できるが、インドネシア語の ber-も語基に多様な名詞を取って、それに関連する動作を表すことができる。「機械を操作する」という意味や「楽器を弾く」という意味など共通して用いられる部分もあれば、日本語では言えるが、インドネシア語では言えないもの、あるいはその逆も存在することがわかった。

最終的な本稿の主張としては、日本語ではモノ名詞、デキゴト名詞という対立、そしてそれに対応して「ある」と「する」が用いられている解釈が一般的だが、そうではなく、重なる部分は多いが、「ある」と「する」は、モノ名詞・デキゴト名詞とは、それぞれ異なる理由で共起する名詞が制限されており、これらは対立する概念ではなく、別の原理で動いていることを強調するものである。影山 (2011) の「時間の概念を含むか」の軸のみで語れば、強引にでも 2 つの名詞の種類に分けることができる。しかし、その後の研究で、その他の基準でもデキゴト名詞の認定を行ったことで、時間の概念を含まないこともあるなど、デキゴト名詞の範囲が拡大していった。「時間の概念を含むか」で分類した名詞で、対応する共起関係が説明できることに意味があると考えられるので、それらがどのように関連しているか、あるいは関連していないのかの機序を明らかにすることは有意義なことだ。

また、いくつか残る課題として、本研究の出発点として、第 1 章で述べた、存在の「ある」と共起しない名詞は存在しないのだろうか、という点がある。本稿では日常言語と哲学的な概念での存在は異なるとして、深くは立ち入らなかったが、何が「ある」と共起するかは、哲学的にもまったく重要ではないわけではないだろう。

言語哲学の初期は、バートランド・ラッセルなどに代表されるような日常言語を廃する考え方が主流だったが^{*1}、後に日常言語学派 (Ordinary Language Philosophy) が誕生した。日常言語学派は、後期のルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインやジョン・L・オースティン、ピーター・フレデリック・ストローソンなどの哲学者によって発展したが、それぞれの主張は統一されておらず、個々の哲学者ごとに主張されていたことに注意がいる。

^{*1} このような考え方を論理的原子論 (logical atomism) と呼ぶ。論理的原子論者らは、すべての真理が原理的に明瞭に表現されるような、論理的に理想の言語を仮定している (Klement 2020)。

日常言語学派では、論理的に理想的な言語を使用せずとも、日常の言語の使用を分析することで重要な哲学的な知識につなげることができると考えている (Parker-Ryan n.d.)。近年の言語哲学においては、日常言語を廃した「理想的な言語」を用いた研究が主流となっているが、日常言語を重視する思想が完全に受け入れられていないというわけではない。意味研究における意味論と語用論のように、双方が言語の異なる側面に注目し、補完的に言語の意味を探求できていることから、論理的に理想の言語を用いた哲学と、日常言語を用いた哲学でも同様のことができるのではないかと考えられる。当然、言語によって一般的な存在を表す表現と共起できる名詞は異なると推測できるが、それでも通言語的な性質、言語間の差異などがわかることは、言語学においても哲学においても大きな飛躍であることが期待される。

また、本研究で扱った単語は、すべての日本語の単語を精査しているわけではなく、先行研究で扱われたものや、特徴的な共起を示す単語と類似した意味を持つ単語を調べる、というように対象とする単語を探し出した。そのため、この他にも、「ある」と「する」との共起に注目したときに特徴的なふるまいを見せるものも、おそらくまだ存在しているだろう。そのような単語があれば、「ある」と「する」がどのような名詞を選択しているかがより詳細に記述することができるようになる。

例文出展 URL

- (101a) <http://repository.gunadarma.ac.id/browse?type=subject=1=ASC=20=1=QFD=X>
- (101b) <https://www.indonetwork.co.id/s/jawa-tengah>
- (102) <http://balitsa.litbang.deptan.go.id/ind/index.php/berita-terbaru/154-tomat-sehat.html>
- (103) <http://amboe-amboe.blogspot.com/>
- (104a) http://www.stmiknh.ac.id/index.php/program-studi/index.php/10.000/index.php/program-studi/index.php?view=article=40%3Acategory-internet-jaringan=184%3Aberita-twitter-lebih-gencar-dibanding-facebook=component=1=default==com_content
- (104b) https://www.jakarta.go.id/birohukumv3/himpunan_perundangan/category/14/5
- (104c) <http://perpustakaan.fk.ui.ac.id:8080/opac/themes/green2/hasilcari.jsp?method=similar=16282=lokal>
- (104d) <https://www.berani.co.id/news/15/1011136/Berita-Luar-Negeri/Kota%20Fantasi%20dari%20Kue%20Jahe>
- (104e) <https://bem.fkunswagati.ac.id/halkomentar-143-ngetweet-ternyata-bisa-menyegarkan-suasana-hati-di-hari-2.html>
- (105a) <https://berlianutama.indonetwork.co.id/prod/katalog-produk.htm>
- (105b) <https://esex2.wordpress.com/tag/anak/>
- (106a) <https://web.pln.co.id>
- (106b) http://mbi.fkip.unib.ac.id/index.php/pesan-/pedoman-umum-ejaan-yg-disempurnakan/cat_view/59-smt-ii2013?limit=5=hits=DESC=5
- (107) <http://papers.gunadarma.ac.id/index.php/economy/article/view/2564>
- (108a) <https://sastralahat.blogspot.com>
- (108b) <http://ns1.kompas.web.id/read/read/2011/01/28/386/418841/simfoni-cantabile-merdu-dari-twilight-orchestra>
- (108c) <https://www.umm.ac.id/id/berita-muhammadiyah-229-gendhing-bahana-uad-bercerita-di-tiga-kampus.html>
- (109a) http://opac.iainpalu.ac.id/index.php?p=show_detail=8713

- (109b) <https://edublogs.org/wp-signup.php?new=batak>
- (109c) <http://www.bappeda.dharmasrayakab.go.id/index.php/music/itemlist/user/42-2014-02-01-15-17-51?start=48>
- (110a) <http://www.kwarcabjogja.or.id/index.php/en/struktur/mabicab/item/26-bimtek-jurnalistik-dan-protokol-untuk-masa-depan-pramuka-jogja/26-bimtek-jurnalistik-dan-protokol-untuk-masa-depan-pramuka-jogja?start=1220>
- (110b) <https://www.blogger.com/blogin.g?blogspotURL=https://siskhana.blogspot.com/&type=blog&bpli=1&ppli=1>
- (110c) <http://us.m.bola.viva.co.id/news/read/455773-kekasih-sinclair-seksi-dan-menggoda-di-reality-show-terbaru>
- (111a) <https://fatinilam-sari-ahmad.blogspot.com>
- (111b) <https://ahmadnajip.wordpress.com>
- (112a) <https://lilyoktari.wordpress.com>
- (112b) <https://parenting.co.id/dunia-mama/perjalanan++yang+pantas>
- (112c) https://yaqeen190479.blogspot.com/2008_03_01_archive.html
- (113a) <https://akhwat.web.id/muslimah-salafiyah/membantah-feminis/surat-an-nisa-satu-bukti-islam-memuliakan-wanita/?replytocom=1668>
- (113b) <https://www.umm.ac.id/id/umm-news-845-deddy-mizwar-datang-ke-kampus-putih.html>

参考文献

- 小野尚之. 2005. 『生成語彙意味論』(日英語対照研究シリーズ 9). くろしお出版.
- 小野尚之. 2014. 「『N をする』構文における項選択強制」岸本秀樹 & 由本陽子(編), 『複雑述語研究の現在』17-40. ひつじ書房.
- 小野尚之. 2020. 「軽動詞構文における強制と共合成: 『する』と『ある』をめぐる」. 由本陽子 & 岸本秀樹(編), 『名詞をめぐる諸問題』88-108. 開拓社.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』. ひつじ書房.
- 影山太郎. 2011. 「モノ名詞とデキゴト名詞」影山太郎(編), 『日英対照 名詞の意味と構文』, 36-60. 大修館書店.
- 岸本秀樹. 2019a. 「軽動詞構文における意味役割付与のメカニズム」岸本秀樹(編), 『レキシコンの現代理論とその応用』, 99-126. くろしお出版.
- 岸本秀樹. 2019b. 「軽動詞構文の移動現象: 名詞編入と項上昇」西原哲雄, 都田青子, 中村浩一郎, 米倉よう子, 田中真一(編), 『言語におけるインターフェイス』, 11-24. 開拓社.
- 岸本秀樹. 2023. 「『青い目をしている』構文はどのように形成されるのか?」岸本秀樹, 臼杵岳 & 于一楽(編), 『構文形式と語彙情報』, 2-26. 開拓社.
- 小葉哲哉. 2023. 「『N をする』構文の多様性と語彙情報の役割: 動詞派生名詞を中心に」. 岸本秀樹, 臼杵岳 & 于一楽(編), 『構文形式と語彙情報』, 27-51. 開拓社.
- 定延利之. 2016. 『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房.
- 杉岡洋子. 2020. 「『動詞連用形+名詞』複合語の多義について」由本陽子 & 岸本秀樹(編), 『名詞をめぐる諸問題』, 2-23. 開拓社.
- 原真由子. 2020. 『インドネシア語』(世界の言語シリーズ 14). 大阪大学出版会.
- パルデシ, プラシャント. 2023. 『基本動詞ハンドブック』国立国語研究所 研究系. (doi:10.15084/0002000145) (<https://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>)
- 八木健太郎. 2017a. 「非動作性名詞をヲ格にとる『スル』文の振る舞いについて: 換喩からの統一的説明」『中央学院大学人間・自然論叢』43. 3-37.

- 八木健太郎. 2017b. 「モノ名詞がデキゴト性を帯びる現象について」『中央学院大学人間・自然論叢』44. 111 – 125.
- Aronoff, Mark. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Asher, Nicholas & Pustejovsky, James. 2013. A Type Composition Logic for Generative Lexicon. In James Pustejovsky, Pierrette Bouillon, Hitoshi Isahara, Kyoko Kanzaki & Chungmin Lee (eds.), *Advances in Generative Lexicon Theory*, 39 – 66. Dordrecht: Springer. (doi:10.1007/978-94-007-5189-7_3)
- Bricker, Phillip. 2016. Ontological Commitment. In Edward N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Winter 2016. Metaphysics Research Lab, Stanford University. (<https://plato.stanford.edu/archives/win2016/entries/ontological-commitment/>)
- Carlson, Greg N. 1977. *Reference to Kinds in English*. Amherst: University of Massachusetts. (Ph.D. Thesis.)
- Klement, Kevin. 2020. Russell’s Logical Atomism. In Edward N. Zalta (ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Spring 2020. Metaphysics Research Lab, Stanford University. (<https://plato.stanford.edu/archives/spr2020/entries/logical-atomism/>)
- Leipzig Corpora Collection. *Indonesian mixed corpus based on material from 2013*. Leipzig Corpora Collection. (https://corpora.uni-leipzig.de?corpusId=ind_mixed_2013)
- Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Murphy, M. Lynne. 2010. *Lexical Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nomoto, Hiroki, Shiro Akasegawa & Asako Shiohara. 2018. Reclassification of the Leipzig Corpora Collection for Malay and Indonesian. *NUSA: Linguistic Studies of Languages in and around Indonesia* 65. 47 – 66. (doi:10.15026/92899)
- Parker-Ryan, Sally. n.d. Ordinary Language Philosophy. *The Internet Encyclopedia of Philosophy*. (<https://iep.utm.edu/ord-lang/>) (最終閲覧日: 2025 年 1 月 5 日)
- Perlmutter, David M. 1978. Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis. *Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 38. 157 – 190. (doi:10.3765/bls.v4i0.2198)
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.